柏原交流ゾーン整備基本構想

なりい地柏原

時代のフロントランナーに!!

令和５年３月

柏原交流ゾーン構想検討会議

兵庫県丹波県民局

目　次

概要版 ―――――――――――――――――――――――――――――――――――― ⅰ～ⅴ

はじめに ――――――――――――――――――――――――――――――――――――― 1

柏原交流ゾーンの概要 ―――――――――――――――――――――――――――――― 2

まちの拠点創造プロジェクトの概要 ――――――――――――――――――――――――― 4

Ⅰ 社会潮流の変化、近未来の展望 ――――――――――――――――――――――――― 5

Ⅱ 柏原を読み解く－現状・課題分析 ―――――――――――――――――――――――― 7

Ⅲ 基本コンセプト ―――――――――――――――――――――――――――――――― 13

Ⅲ-1 コンセプトの組み立て、デザイン ――――――――――――――――――――――― 13

Ⅲ-2 コンセプト検討の視点 ――――――――――――――――――――――――――――― 13

Ⅲ-3 基本コンセプトの提示－メインコンセプト・サブコンセプト－ ――――――――― 14

Ⅲ-4 将来イメージ ――――――――――――――――――――――――――――――――― 18

Ⅳ エリア別基本構想 ――――――――――――――――――――――――――――――― 19

Ⅳ-1 柏原駅南用地（NEW KAIBARA）――――――――――――――――――――――― 19

Ⅳ-2 丹波の森公苑（HILLSIDE KAIBARA）――――――――――――――――――――― 23

Ⅳ-3 城下町地区（OLD KAIBARA）――――――――――――――――――――――――― 26

Ⅴ 3エリアの一体的整備、連携促進に向けて ―――――――――――――――――――― 30

Ⅵ 柏原交流ゾーンを核とした広域連携の推進 ――――――――――――――――――― 32

Ⅶ 今後の課題－基本計画策定に向けて－ ―――――――――――――――――――― 34

おわりに ――――――――――――――――――――――――――――――――――――― 36

＜柏原交流ゾーン構想検討会議メンバー・検討状況＞ ――――――――――――――― 37

＜用語集＞ ―――――――――――――――――――――――――――――――――――― 39

右上に＊がついている言葉については、用語集で解説しています

基本構想の性格　〔本編 p1〕

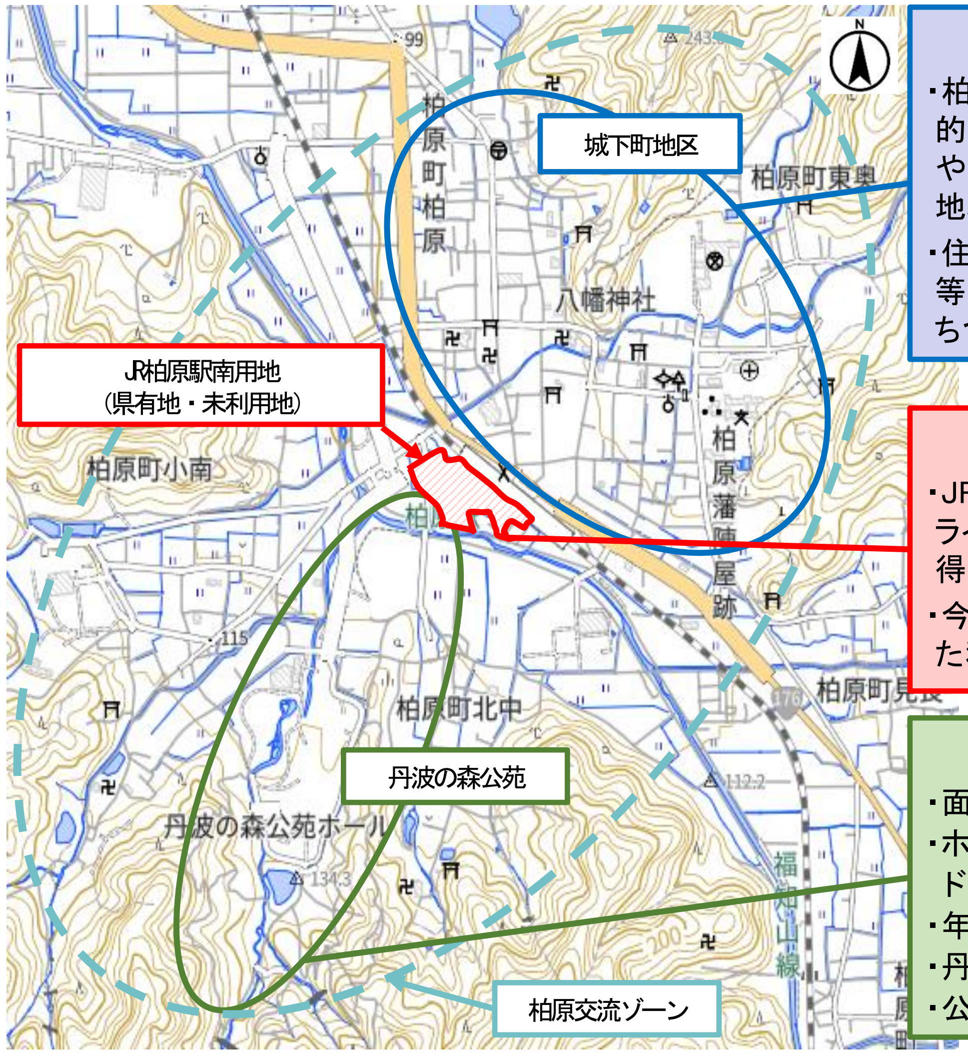
- 「柏原交流ゾーン整備基本構想」は、丹波地域の核として、**柏原地域における地域再整備のビジョン**を描き、方向性を提示
- 柏原地域が**時代のフロントランナーとして進むための指針**
- このビジョンに共感し、柏原再生に携わる人が一人でも多く現れることを期待

まちの拠点創造プロジェクトの概要　〔本編 p4〕

- 『まちの拠点創造プロジェクト』は、「丹波2050地域ビジョン」(2022(令和4)年3月策定)のなかで、「Ⅴ 将来像実現に向けた方向性」の実現に向け、シンボルプロジェクトに位置づけられた事業
- 柏原交流ゾーンにおける多拠点居住やテレワーク等新たな暮らし方、働き方にも対応した複合的な都市機能のあり方を検討
- －令和4年度:整備基本構想を策定　令和5年度:整備基本計画を策定

柏原交流ゾーンの概要　〔本編 p2～3〕

- **JR柏原駅南用地**（県有地・未利用地：約2.4ha）、**兵庫県立丹波の森公苑、城下町地区**の３つのエリアで構成：総面積約100ha（丹波都市計画区域の非線引き区域）
- 人口：約3,300人、世帯数：約1,500世帯（「丹波市住民基本台帳人口」R4.4）
- 『丹波市都市計画マスタープラン』（令和4（2022）年9月改定）において、地域資源を活用して交流やにぎわいを創出する**「交流ゾーン」**に位置づけられている
- 『丹波2050地域ビジョン』の**「まちの拠点創造プロジェクト」**の対象エリア
- 城下町地区：「歴史的な町の区域」（緑豊かな地域環境の形成に関する条例）、城下町かいばら広告景観モデル地区（兵庫県屋外広告条例）に指定



城下町地区
- 柏原藩陣屋跡や柏原八幡宮等の歴史的建造物が現存。国や県の行政施設や文化・学校施設等が集積する、丹波地域の中心拠点の1つ
- 住民と行政、(株)まちづくり柏原(TMO)等が協力して、中心市街地活性化のまちづくりを推進(H12～)

JR柏原駅南用地
- JR福知山線複線化に伴うパークアンドライド方式の駐車場用地として県が取得(H7～9年度)
- 今後「地元地区全体の活性化を含めた利活用方策を検討」

兵庫県立丹波の森公苑
- 面積:約36ha、H8.4開園
- ホールや生活創造センター、グラウンド、テニスコート等からなる
- 年間入苑者数13万人超(令和3年度)
- 丹波の森大学等生涯学習の拠点
- 公苑奥の里山には遊歩道を整備

Ⅰ 社会潮流の変化、近未来の展望　〔本編 p5～6〕

- 自由で多様なライフスタイルの浸透⇒地域社会の変容(共生社会、全員活躍型社会)
- デジタル革新の進展⇒デジタル・プラットフォーム構築(都市OS)、DXによる新サービス創出
- 価値創造社会の到来⇒各人の創造的活動を支えるまち(創造都市・創造農村)
- 活動人口、関係人口拡大の必要性⇒社会参加率向上、健康寿命延伸、開かれた地域社会形成
- 社会・経済・環境面での持続可能性追求⇒歩いて暮らせるまちづくり、環境負荷低減、共有経済

Ⅱ 柏原を読み解く－現状・課題分析　〔本編 p7～12〕

まちのアイデンティティ
- 「交流」集い、交わるまち、拠点性
- 「伝統」まちの佇まい、文化
- 「学習」学びの伝統、教育力
- 「品格」矜持、市民力、都市格
- 「先導」明治の近代化、丹波の森づくり

圏域都市構造
- 準中心が分散する多心型都市構造
- 広域化・遠隔化する自動車生活圏
- 歩行圏のまちづくり、持続可能な都市
- 新しい働き方・暮らし方の実践空間
- 多様なﾗｲﾌｽﾀｲﾙの創造が可能な都市

顕在化するまちの課題
- 空き地・空き家の増加→活力低下
- 歩いて行ける日常買い回り店舗の不足
  →普段使いのまちとしての不便さ
- 回遊性のないまち、時間を使えないまち
- ハレの日に集い交わる場所の欠如

市民の声
- たまり場、居場所の必要性
- 多様なﾗｲﾌｽﾀｲﾙを支える住まいの存在
- 子連れ、若者、女性が楽しめる機能・施設
- IT関連施設・ﾃﾞｼﾞﾀﾙｲﾝﾌﾗの整備
- 地域のｹﾞｰﾄｳｪｨ・ｼｮｰｹｰｽ機能の整備
- 交流ゾーン内をつなぎ、一体化

時流変化を受けて－地方回帰、脱炭素社会－
- 令和4年丹波市社会増減:市制開始以来、はじめてプラスに
  →増加する移住者や関係人口のニーズに応え、
  　多様なライフスタイルの選択が可能なまちづくりの推進
  →移住者や関係人口を地域の力に活かす仕組みづくり
- 「丹波市ゼロカーボンシティ宣言」(2022.12.27)
  →脱炭素に向けた持続可能なまちづくりを宣言

KAIBARA 時代のフロントランナーへ
コンパクトにまとまった市街地、歴史的建造物・街並み景観、教育文化の伝統、鉄道、里山空間など
↓
時代が求める新しい暮らし方に適合したまち(**持続可能な都市、創造都市**)として輝く可能性

Ⅲ 基本コンセプト

組み立て･デザイン　〔本編 p13〕

－新しい社会潮流（時流変化）、まちのアイデンティティ･DNA、顕在化するまちの課題（都市機能等）、圏域都市構造、市民の声等 を踏まえデザイン

メインコンセプト　〔本編 p14〕

「古くて懐かしくも、新しいまちKAIBARA」
－時空をデザインする価値共創都市をめざして－

- 歴史･伝統を継承しつつも、時代潮流の変化の中で多様な暮らし方、働き方の実現が可能な都市
- 古来より知恵が生まれ、練られる場であった歴史を継承し、価値創造に挑戦するすべての人をあたたかく受け容れ、新しい知恵の創造、イノベーションの創出に取り組む
- 多種多様な新たな人と出会い、交わり、学び、探求し、新たなコトにチャレンジでき、人々に刺激を与える、知的好奇心に富んだまち
- 「次世代活動･交流層」が集積し、丹波という地域を越え、広域的に新しい人の流れを生み出す磁場として発展するまち
- 「デザイン」がこのまちの発想の原点。街並み、建物といった空間だけでなく、文化、暮らし方、エリアマネジメントなどソフト面でも、デザイン感度の高いまち
- 丹波のショーケースであり、丹波らしい人々、もの、生活文化に出会うことができるまち
- 誰をも受け入れる、包み込む懐が深いまち、誰しもが程良さ、居心地の良さを感じるまち
- 伝統（柏原らしさ･丹波らしさ）と新しいチャレンジ、試行錯誤のなかから、世界と分かち合える21世紀の普遍的な暮らし方（持続可能な自律分散型居住スタイル等）を提案

→ 明治の近代化や、「丹波の森づくり」を先導してきた伝統を引き継ぎ、再び丹波の次代を切り拓くミッションに挑むまち、柏原

（１９世紀）		（２０世紀）		（２１世紀）
門前町・城下町	→	行政・教育都市	→	**価値共創都市**

検討の視点－双眼的･複眼的･多元的･統合的視点－　〔本編 p13〕

･伝統と革新　･広域と狭域（広域圏と歩行圏）　・定住と交流（定住人口と関係人口）
･多様性と包摂　･仮想と現実

サブコンセプト　〔本編 p15～17〕

「つながり」「心地よさ」「挑戦」
３Ｃ＝Connected, Comfortable, Challenge

■ つなぐまち、つながるまち－コネクティッド・シティKAIBARA－
～柏原は時空を超えて様々なものをつないでいきます～

- 様々な人をつなげ異質な出会いを演出
- 自然と人間をつなぐ空間
- 過去と未来がつながった都市
- 新しい暮らし方･働き方の実践の場
- しごととくらし、生活と観光がつながったまち
- 仮想と現実がつながったまち

■ 程良さが心地よいまち－ウェル・バランスドシティKAIBARA－
～柏原は滞在するすべての人に居心地の良さを提供します～

- まちの佇まい、風情が心地よいまち
- まちなかに自分の居場所があるまち
- 食･住･遊のバランス、仕事と生活のバランスのとれたまち
- 自然とのふれあい
- 健全なまち、健康面からも心地よいまち

■ 挑戦を支えることで成長し続けるまち－チャレンジシティKAIBARA－
～柏原は学び続ける、行動し続ける人たちを応援します～

- 市民の主体的な活動を支援
- 起業や創作活動を志す人を後押し
- 最先端のスマート技術基盤が整備され、仮想空間で活動しやすいまち
- 事業創造、起業の拠点
- 多様な学びの場を創造

将来の姿 （203X年）　〔本編 p18〕

- 柏原駅の連絡通路を通って城下町地区と柏原駅南用地、丹波の森公苑の間を行き来する新たな人の流れ
- 丹波の文化創造発信拠点である柏原駅南用地の施設や丹波の森公苑は、市の内外から来る訪問客･滞在客で賑わう
- 柏原駅南用地や城下町地区には、若い世代を中心に域外から人が移り住んでいる－大都市からUターンしテレワークする若者、二地域居住の拠点にする域外の人々（関係人口）等
- 柏原駅南用地のオフィス棟、城下町地区の古民家、丹波の森公苑施設などに様々な活動スペースが誕生－行政機関職員、地元企業社員、学生らが利用
- 市の内外から起業をめざす人や創作活動に取り組む人たちが、数多く流入し、新たなテクノロジーやデザインを学ぶ
- 丹波の森公苑にある支援機関などを介して、起業者･起業志望者間、クリエイター間の交流が盛んに
- 新たな交流、つながりの中で、丹波の資源を活かした新事業が誕生。デザイン性に優れたショップや空間、メイドイン柏原･丹波の優れたデザインの商品がさらにこの地へと人々を惹きつける誘因に
- 城下町地区では、世代を超えた交流の場、まちの居場所がつくられる－住民間だけでなく、住民と滞在者（次世代活動･交流層）、訪問者の新たなつながりが誕生
- 城下町地区では、歩いて暮らせるまちづくりが進む－街路整備、ポケットパーク等の整備、EVカート等での移動支援
- 柏原交流ゾーンでは、専用回線の整備がなされ、城下町地区と柏原駅南用地、丹波の森公苑ではどこにいても高速、大容量の通信が可能に
- 持続可能な都市をめざし、ゾーン全体で再生可能エネルギーの活用や資源循環等に取り組む

Ⅳ エリア別構想

〔本編 p19～22〕

柏原駅南用地－NEW KAIBARA－

【エリアコンセプト】

- 21世紀社会に相応しい新しい働き方、暮らし方が可能な空間　＜FRONTEDGE KAIBARA＞
- 丹波市、丹波地域の玄関口であり、その魅力を発信するショーケース　＜CHATTA(ちゃった) KAIBARA＞
- 丹波の木のぬくもり、木のある暮らしを体感する場　＜WOODY KAIBARA＞

【整備の方向性】

・様々な人が集い、交わり、学び、新たな価値、文化を創造する空間
・次世代活動・交流層が集積し、磁場となるような空間
・あらゆる世代が憩い、佇み、活動する場
・多目的利用、柔軟な利用が可能な施設として整備
・新しい柏原、新しい丹波を象徴する地区として整備
・丹波市、丹波地域の産物を展示・発信、販売する施設を整備
・丹波産木材を使って建築物を全て木造化・木質化
・丹波の玄関口に相応しい宿泊・滞在・交流施設
・丹波の森公苑のゲートウェイ、ブランチとして機能
・城下町地区と丹波の森公苑をつなぐ結節点

【導入が想定される主な施設・プログラム等】

・芝生広場
・木のクラブハウス（交流ｽﾍﾟｰｽ＆ﾃﾞｻﾞｲﾅｰｽﾞﾎﾃﾙ「木の迎賓館」）
・集合住宅・滞在型施設（木造中層建築物等）
・マイクロバウハウス（芸術工芸学校）
・木のハコ・オフィス（多目的ワークスペース）
・モデルハウス（丹波型環境共生・健康住宅）
・サロン・デ・デザイン（市民主体の学習交流サロン）
・エキヨコ（商業・物販・飲食施設）
・ミニ・トランジットモール（発着場）
・シンボルタワー（木製展望台）
・スマートKAIBARA（Local 5G拠点）

〔本編 p23～25〕

丹波の森公苑－HILLSIDE KAIBARA

【エリアコンセプト】

- 新しい丹波の暮らしをデザインする知識創造拠点　＜KNOWLEDGE KAIBARA＞
- 新しい余暇・スポーツの楽しみ方を提案する余暇創造拠点＜FUN KAIBARA＞
- 里山の営みを五感で感じることができる、都市と自然をつなぐ空間＜GREEN KAIBARA＞

【整備の方向性】

・文化・生涯学習活動から、知識創造、事業創造、余暇創造まで、あらゆる創造活動の拠点として機能向上
・丹波の森づくりの拠点として、持続可能な地域づくりについての研究・実践活動を推進
・地域発イノベーションの創出をめざすシリ丹バレー構想のヘッドクォーターとして多様な事業活動を促進
・丹波の森公苑の活動の仮想化
・全て世代の人が学習、余暇・スポーツを楽しめる場として魅力向上
・里山に入り、里山で学び、活動する機会を提供

【導入が想定される主な施設・プログラム等】

・ナレッジ柏原・森のナレッジサロン
・ヴァーチャル「丹波の森公苑」
・森のビジネスパーク
・森の文化体験館・縄文の森
・丹波の森探求学習センター
・アーバンスポーツ・ニュースポーツ系施設
・昆虫館・動物ふれあい広場
・プレイスメーキングの実践
・里山シャトルの運行(EVトゥクトゥク、EVカート)

〔本編 p26～29〕

城下町地区－OLD KAIBARA－

【エリアコンセプト】

- 誰もが自分の居場所のある、安らぎに満ちたまち、柏原 ＜HOMETOWN KAIBARA＞
- 賑わいが戻り、絶えずどこかで人の話し声が聞こえるまち、柏原＜REBORN KAIBARA＞
- 街中で小さな挑戦ができるまち、柏原　＜CHALLENGE KAIBARA＞

【整備の方向性】

・歴史的建造物を保全し、その魅力の維持・向上に向け街並み景観の整備を推進
・空き家を有効利用し、多様なまちの居場所を創出
・まち全体をコワーキングスペース化
・空き家・空き地利用を促進し、起業や創作活動などにチャレンジできる機会を提供
・様々な芸術にふれることのできるまちづくりの推進
・古い市街地に最先端の情報通信基盤を整備
・歩いて暮らせるまちづくりの推進

【導入が想定される主な施設・プログラム等】

・「まちの居場所」づくりプログラム
・「市が立つまち柏原」プログラム
・まちごとコワーキングスペース「まるごと柏原」
・ポケットパーク
・コミュニティ冷蔵庫・保管庫（フードバンク）
・まちなか道具蔵・リペアハウス
・まちなか食堂（子ども食堂・大人食堂）
・まちなかミニギャラリー、ミニ博物館
・拡張現実、仮想空間での「柏原城下町」の再現
・スマートKAIBARA（Local 5G拠点）
・まちなかシャトルの運行(EVトゥクトゥク、EVカート)

Ⅴ 3つのエリアの一体的整備、連携 〔本編 p30～31〕

- **歩行者動線の整備**

  ー**歩行者専用空間**の確保、駅南北の**連絡道・連絡橋**等の施設整備

- **新たな移動手段の導入**

  ー**里山シャトル、まちなかシャトル**の運行：EVトゥクトゥク、EVカート等のグリーン・スローモビリティを丹波の森公苑～柏原南用地間～城下町地区間で定期運行
  ー**ミニトランジットモール（発着場）**の整備による交通結節機能の強化
  ーサイクルステーションの設置

- **高速大容量通信網の整備**

  ー**専用回線**の敷設：兵庫情報ハイウェイのアクセスポイントから、城下町地区～柏原南用地～丹波の森公苑間に敷設。柏原交流ゾーン全体で高速大容量の通信が可能に
  ー**IT特区・スマートKAIBARA（Local 5G拠点）**：城下町地区及び柏原駅南用地の一団の用地をIT特区に位置づけ、Local 5Gの利用が可能な施設を整備。

- **エリアマネジメント組織の設立**

  ー柏原交流ゾーン全体のエリアマネジメントを行う**パートナーシップ（協議会）**組織を設立
  ー**エリアブランディング**を一体的に実施
  ー集客イベントやたんばコインを活用したキャンペーンなどを関係機関と連携して実施

- **循環型・環境共生型社会経済システムの導入**

  ー**再生エネルギー利用、廃棄物リサイクル**など、環境面でもゾーン一体となった取組を推進
  　→再生可能エネルギー100%ゾーン
  ー**循環経済、共有経済**の実現に向け、デジタル技術を活用した新しい仕組みの導入を促進
  　→地域電子ポイント「たんばコイン」の活用による資金循環の促進

＜3エリア間の連結・回遊方法＞

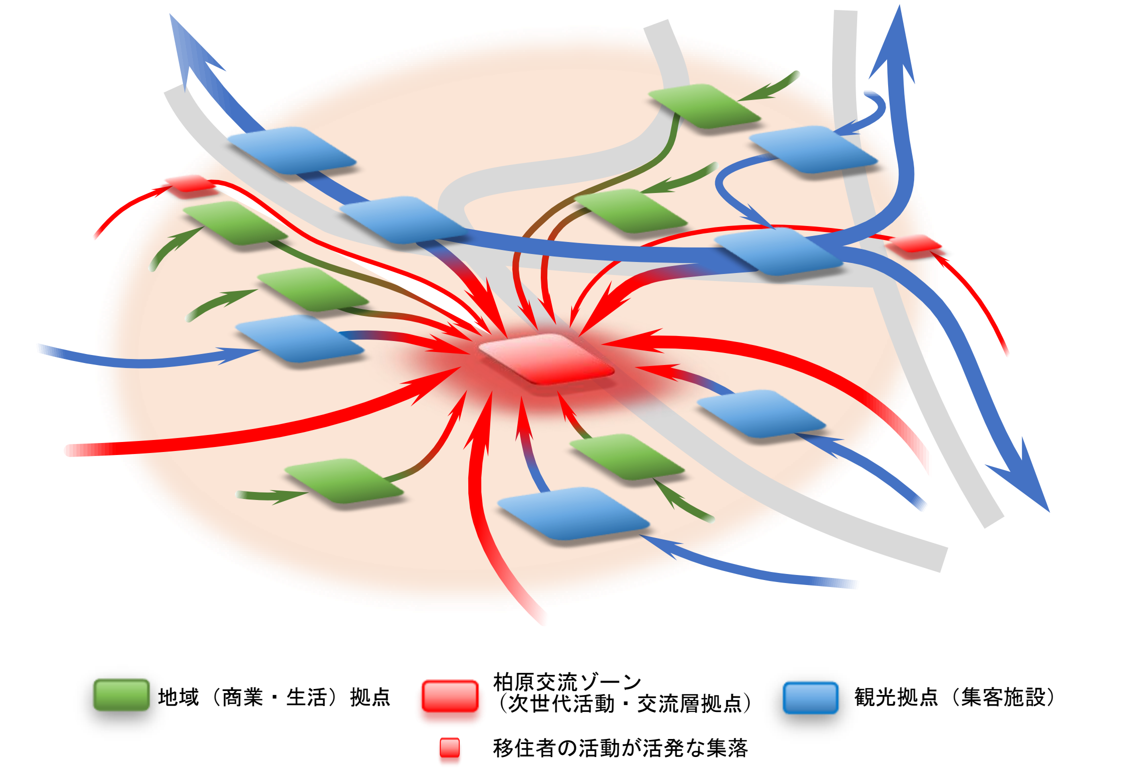
Ⅵ 柏原交流ゾーンを核とした広域連携の推進 〔本編 p32～33〕

＜丹波市都市圏における柏原交流ゾーンの可能性＞

ー「次世代活動・交流層」をターゲットにした施設群の独自性、固有性から、**観光客にとっての新たな訪問先（デスティネーション）**になりうる
　→丹波市内での**周遊型観光が多様化**し、**観光客の市内滞在時間、観光消費額の拡大**に寄与する可能性
ー**地域住民**が、地元の商業施設や生活施設等にはない文化・交流、商業機能を有する柏原交流ゾーンを**新たな立ち寄り先**として活用
ー市内集落に居住する**移住者**等は、「次世代活動・交流層」拠点である柏原交流ゾーンを**自らの活動空間、交流の場**として利用

＜柏原交流ゾーンと市内拠点・施設間の連携推進＞

ー市内の道の駅等の集客施設と柏原交流ゾーンの商業・物販施設間で**イベントやキャンペーンを一体的展開**
ー柏原交流ゾーンと市内文化施設間で、リレー方式や共通テーマでの**展示会・催事の共同実施**
ー木工製品、農産物、地場産品などの**アンテナショップ**を交流ゾーンに出店。そこから、本拠地や制作・加工・生産の現場への**コト体験ツアー**などを企画・催行
ー市内の観光・集客施設や里山などの自然空間との間をつなぐ、**巡回・周遊バス**の運行や自転車・EVバイクなどの**レンタル事業**の市内展開
ー車を置き、歩いてあるいは自転車、公共交通機関に乗って市内各所を巡る、**脱自動車型、時間消費型**の旅（**パーク＆ウォーク、パーク＆ライド型ツアー**）の提案



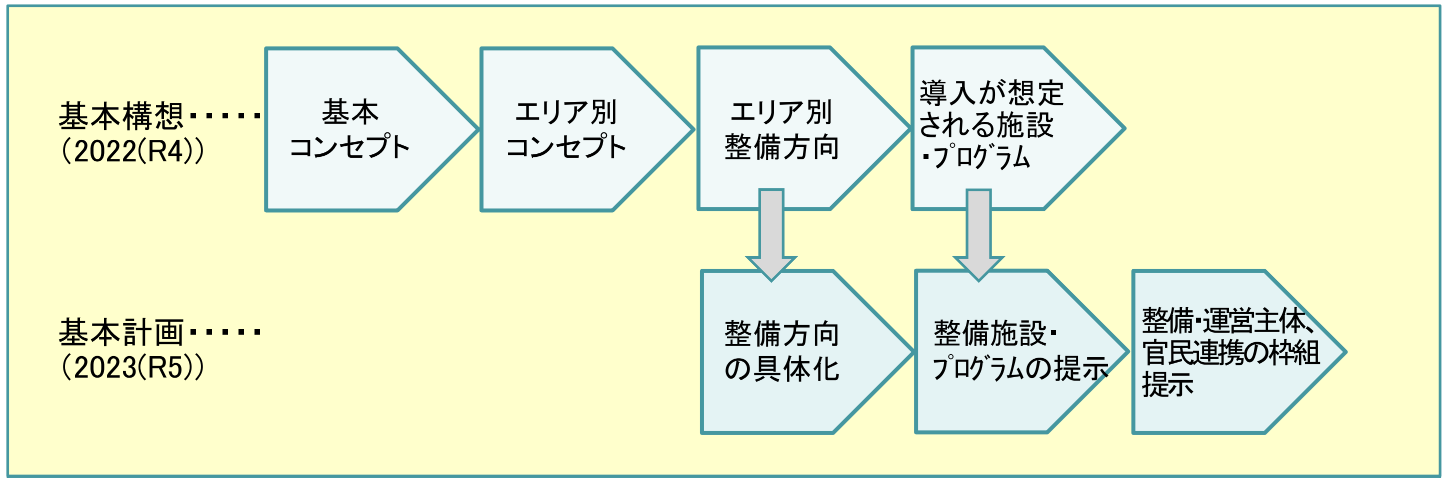
＜丹波市都市圏のイメージ図（柏原交流ゾーンに入るヒトの流れ）＞

Ⅶ　構想実現に向けて～基本計画策定に向けての課題～

〔本編 p34～35〕

- **整備方向の具体化**
  ー3つのエリアの整備方向をさらに具体的に検討、**施設やプログラムの関連付け**を実施
- **今後導入が想定される施設のフィージビリティ検証**
  ー施設の実現可能性を検証し、**施設整備の優先順位**を明示
  ー**既存施設の活用**（転用、多目的利用）も検討（丹波の森公苑、城下町地区）
  ー各施設の**整備主体の検討**

＜基本構想と基本計画の関係＞



・基本構想・・・人々の夢や希望を踏まえた、柏原交流ゾーンの将来の発展可能性を示すビジョン
・基本計画・・・施設整備の規模や優先順位、推進主体等を明らかにするアクションプラン

- **パートナーシップ形成と主体間の役割分担**
  ー柏原駅南用地の整備：**民間活力の活用**を基本としつつ、**官民連携のあり方**を基本計画で示す
  ー城下町地区の整備：**(株)まちづくり柏原との事業協働の枠組みや市民参画のあり方**を検討
  ー丹波の森公苑の施設整備：（公財)兵庫丹波の森協会と民間事業者、NPO等との連携のあり方について検討
- **JR柏原駅へのアクセス検討**
  ー柏原駅南用地からJR柏原駅へのアクセス方法について、**駅南用地のゾーニング、土地利用・施設配置計画**を策定するなかで検討
  ー**駅直結（駅南改札設置）**、あるいは**JR福知山線を跨ぐ南北連絡橋の設置によるアクセス確保**のいずれか（もしくは両方）を選択
  ー柏原駅駅舎（ウッディプラザ山の駅）の改修の必要性についても検討
  ー南北連絡橋に関しては、自転車、グリーン・スローモビリティ等の利用も勘案
- **ゾーン周辺エリアとの機能連携**
  ー旧柏原病院跡地など周辺用地とゾーン内の用地・施設との機能連携のあり方について検討
- **柏原駅南用地の暫定利用推進**
  ー2023（令和5）年度から様々なイベントに用地を提供
  ー柏原駅南用地の整備完了までの**土地暫定利用方策**について基本計画に示す

キーワード「次世代活動・交流層」

〔本編 p10〕

- ポストコロナ社会、超スマート社会に対応し、**時間や場所にとらわれない働き方、暮らし方**（テレワーク、ワーケーション、ノマドライフ等）**を志向**する人々
- しごとや活動に応じて複数の住まいを柔軟に使い分ける(**多拠点居住**)、あるいは定住場所を持たず各所で滞在・活動(**ノマドライフ**)するなど、**自由で、多様なライフスタイルを実践**しようとする人々
- IT業務や創作活動（デザイン、アート）等に従事し、**時代感覚に富み、教育や食、デザイン等への感度の高い人々**

- 基本構想では、この「次世代活動・交流層 」の集積をめざし、この層を惹きつける、**多様なライフスタイルの選択が可能なまちづくり**の推進をうたっている
- この「次世代活動・交流層」として期待される人々と地域密着層や観光・来訪層が、交流・連携を進める中で、共に新たなライフスタイルを創造・創発していくことが期待される

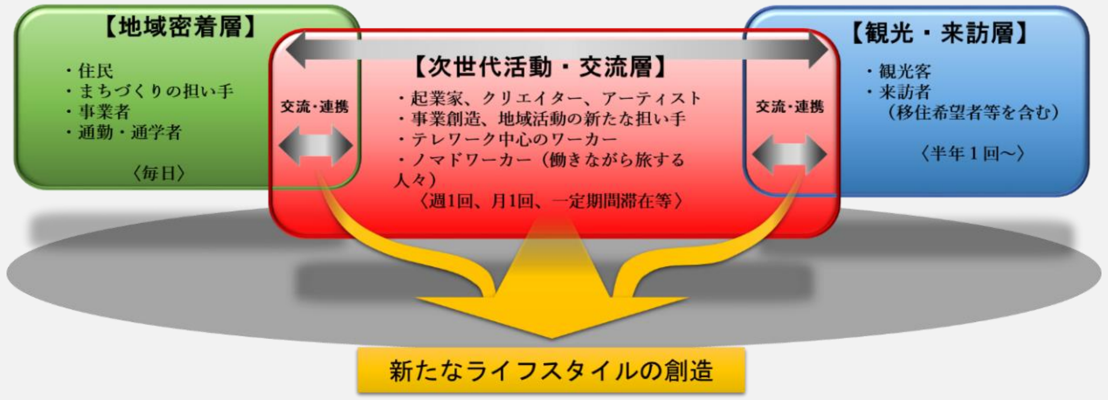


図 柏原交流ゾーンに集い、交わる人々による新たなライフスタイルの創造

はじめに

どこか懐かしさを感じるまち、柏原。初めて来た人も、昔来たことがあるように感じるまち、柏原。通りすがりの高校生が「おはようございます」、「さようなら」と声をかけてくれ、軒先のご婦人が微笑みながら会釈してくれるまち、柏原。そんなおもてなしを受け、訪問者もまちの一員になったかのような嬉しい錯覚にとらわれてしまうまち、柏原。残したい理由がここにある。

江戸・明治の遺産が残り、昭和という時代の匂いが色濃く残るまち、柏原。歴史のレイヤー（積み重なり）が醸し出すまちの佇まいに往時を偲ぶことができる。その後のモータリゼーションという時代に取り残されたまち、柏原。まちのなかに目立つようになった空き家・空き地に寂しさを覚えてしまう。しかし、市街地の求心力に陰りが見えていた柏原に、今時代のほうから近づき、再び光があたろうとしている。

持続可能な暮らしーサスティナブルライフ。柏原は、この時代が要請する新しい暮らし方に適合したまちとして再び輝く可能性を秘めている。コンパクトにまとまった市街地、歴史的建造物・街並み景観、教育文化の伝統、鉄道、里山空間など、持続可能な暮らしの実現に大切な要素を保持している。

その柏原の可能性を開花させるべく、地域再整備のビジョンを描き、方向性をさし示したのが、本書、「柏原交流ゾーン整備基本構想」である。柏原が時代のフロントランナーとして進むための指針がここに記されてある。このビジョンに共感し、柏原の再生に携わる人が一人でも多く現れることを期待している。

「柏原よ、いざ時代のフロントランナーたらんかな！」

「なりいや柏原、時代のフロントランナーに！」

柏原交流ゾーンの概要

［概況］

・総面積：約 100ha － JR 柏原駅南用地（県有地・未利用地）、兵庫県立丹波の森公苑、城下町地区の３つのエリアで構成。

・人口：約 3,300 人　世帯数：約 1,500 世帯（「丹波市住民基本台帳人口」2022(R4).4）

・「丹波市都市計画マスタープラン」（令和 4（2022）年 9 月改定）において、地域資源を活用して交流やにぎわいを創出する「交流ゾーン」に位置づけられている。

・「丹波 2050 地域ビジョン」のシンボル・プロジェクトの１つ、「まちの拠点創造プロジェクト」の対象区域であり、「次世代都市空間の創造」等を推進する地域。

［法規制・区域・地点指定等］

・「都市計画法」（丹波都市計画区域の非線引き区域）
建ぺい率：城下町地区中心部 70%、その他 60%　容積率：200%

・「緑豊かな地域環境の形成に関する条例」（緑条例）
城下町地区：歴史的な町の区域、駅南用地：まちの区域、丹波の森公苑：主にさとの区域

・「兵庫県屋外広告条例」：「城下町かいばら広告景観モデル地区」

・丹波市ユニバーサル社会づくり実践モデル地区「柏原地域崇広小学校区」

・ひょうごの景観ビューポイント
３地点（木の根橋付近、やぐら公園付近、丹波の森公苑生活創造センター）

［各エリアの概要］

JR 柏原駅南用地（県有地・未利用地）（略称　柏原駅南用地）

・JR 福知山線複線化時のパークアンドライド方式の駐車場用地として、県が 1995～1997（平成 7～９）年度に取得した用地。

・用地取得以降、一部を駐車場用地として丹波の森公苑に譲渡。それ以外の用地は未利用地のまま現在に至る。現未利用地面積は 2.37ha。

・「県政改革方針実施計画」（2021（令和 3）年度）では、駅直近でポテンシャルの高い用地であるとし、今後は「地元地区全体の活性化を含めた利活用方策を検討」する方針を示している。

兵庫県立丹波の森公苑（略称　丹波の森公苑）

・面積：約 36ha。1996（平成 8）年 4 月、県立公園として開園。

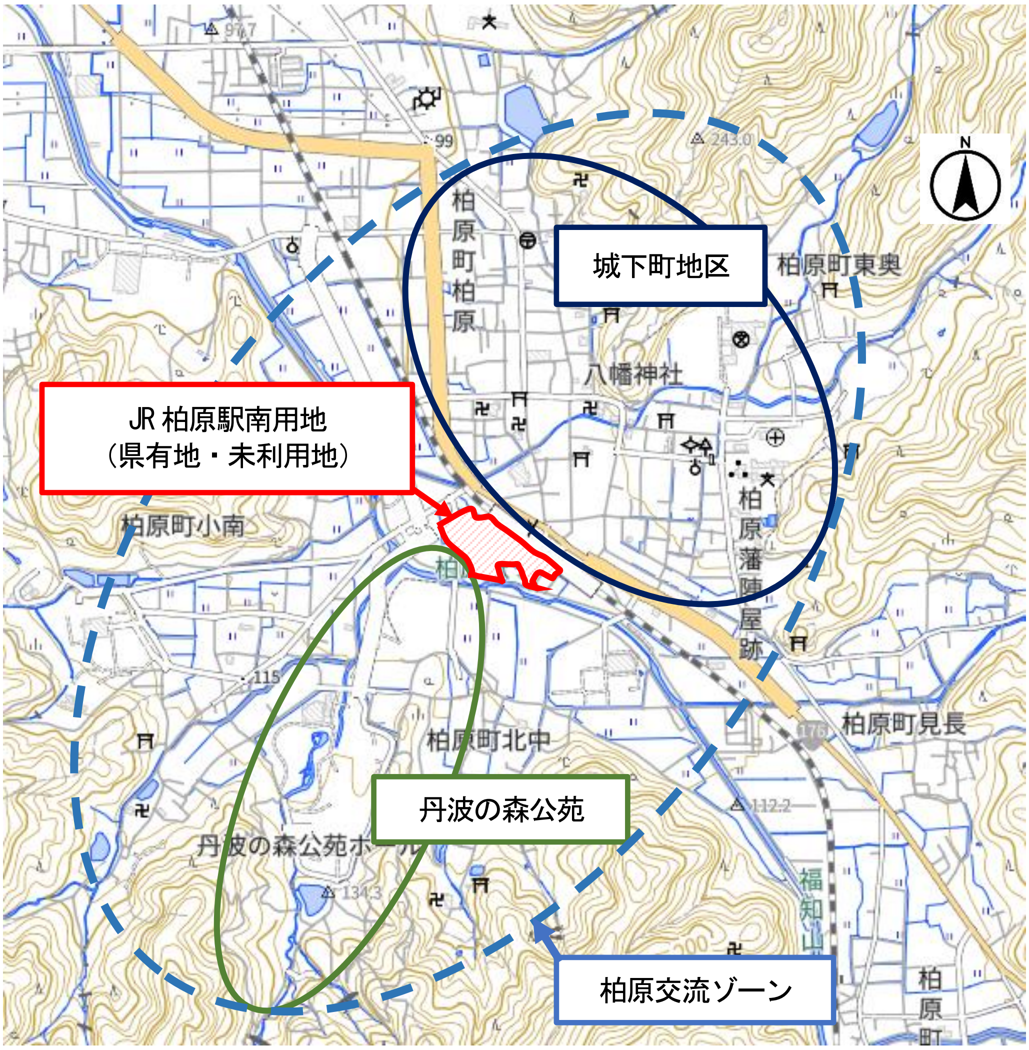
・ホールや生活創造センター（セミナー室、展示ギャラリー、創作工房等）、グランド、テニスコート等を擁し、県民の文化、スポーツ、余暇活動の場として賑わっている。年間入苑

者数 13 万 3 千人（2021(令和 3)年度)。
- 「丹波の森大学」、「丹波 OB 大学・大学院」等が開講されるなど、生涯学習の拠点として利用されている。
- 公苑奥には里山が残り、散策、自然観察が楽しめるよう遊歩道が整備されている。

城下町地区（旧柏原町中心市街地）

- 柏原藩陣屋跡や柏原八幡宮等の歴史的建造物が現存し、城下町の風情を色濃く残すエリア。国・県の出先機関の行政施設（税務署、裁判所、県民局等）や文化・学校施設等が集積する丹波地域、丹波市の中心拠点の１つ。
- 合併前の 2000（平成 12）年から、住民と行政、(株)まちづくり柏原（TMO）等が連携して、中心市街地活性化のまちづくりを推進。中心市街地活性化法で指定されたなかでは、全国で最もコンパクトな中心市街地。

柏原交流ゾーン位置図



まちの拠点創造プロジェクトの概要

[プロジェクトの位置づけ]

・『まちの拠点創造プロジェクト』は、「丹波 2050 地域ビジョン」(2022(令和 4)年 3 月策定)のなかで、「V 将来像実現に向けた方向性」の実現に向け、シンボル・プロジェクトに位置づけられた事業

【展開方向⑤次世代都市空間の創造－懐かしくも新しい、快適なまちへ－】
(「丹波 2050 地域ビジョン」p.28-29　以下出典同じ)

・丹波地域の中心市街地(柏原地区等)において、まちの交流ゾーンとしての求心力向上に向け、多拠点居住やテレワーク*等新たな暮らし方、働き方にも対応した複合的な都市機能整備を官民共同で推進します

【展開方向⑭創造都市・創造農村の形成－文化の発信力強化－】(p.39)

・古民家をリノベーションし、住民、クリエイター、アーティストの創造的活動の場(アトリエ、ミニシアター)等として活用

【展開方向⑱次世代コミュニティの形成】(p.44)

・まちなかでの自動運転、グリーン・スローモビリティ*の社会実験

[プロジェクトの推進]

・柏原交流ゾーンにおける多拠点居住やテレワーク*等新たな暮らし方、働き方にも対応した複合的な都市機能のあり方を検討
　－ 令和 4 年度:基本整備構想を策定　令和 5 年度:基本整備計画を策定

・プロジェクト推進にあたっての基本的考え方
　－民間活力による整備を想定　官民連携・産学官民の役割分担のあり方を検討
　－丹波の特色を活かした活用(「丹波の森構想」等を踏まえた活用)
　－産業政策(起業・IT 支援等)・地域政策(移住･環流対策等)・都市政策(まちづくり・都市計画、インフラ整備等)それぞれの視点を踏まえ、総合的に検討

・プロジェクトの推進体制
　－学識者、地域住民、地域団体、事業者、行政機関等からなる「柏原交流ゾーン構想検討会議」を設置し、全体のとりまとめにあたる(メンバー構成は本構想 p.37 掲載)。
　－検討会議の学識者らで構成する、ワーキングを設置し、検討会議に対し、新たな知見を踏まえた都市機能のあり方等を検討・提言する(メンバー構成は本構想 p.37 掲載)。
　－検討会議の下部組織として幹事会を設置(構成機関は本構想 p.38 掲載)。

Ⅰ　社会潮流の変化、近未来の展望

コロナ禍以降、社会は大きく変化し、近未来を先取りするかのようにデジタル技術の社会実装も加速化している。このような社会変化は、地方都市のまち、柏原の未来にも確実に影響を及ぼそうとしている。以下では、５つの側面から潮流変化を捉え、その地方都市、地域社会への影響について考えてみる。

１．自由で多様な働き方、暮らし方の浸透

・コロナ禍のもと、テレワーク*の普及などで時間や場所にとらわれない働き方、暮らし方が浸透しつつある。多拠点居住やデジタル・ノマドライフ（IT を活用して、仕事をしながら旅する暮らし）も、現実的な選択肢になろうとしている。

・一方、企業では人材確保や能力開発等の観点から社員の副業・兼業が認められはじめている。企業に勤めながらも、兼業・副業により自分が活躍できる場を広げ、様々な分野の人とつながりをつくることが可能となりつつある。

・このように自由で多様な働き方、暮らし方が認められだすなかで、地域社会のあり方も変化を迫られようとしている。一人ひとりの多様性（ダイバーシティ）を認め、互いに支え合いながらともに生きることのできる共生社会（共助の仕組み）の構築を図るとともに、各人が自らの経験や能力を活かして、社会や地域に能動的に参画できる社会（全員活躍型社会)をめざす必要がある。

２．デジタル革新の進展

・デジタル技術の飛躍的発展により、「超スマート社会*」（Society5.0）が近い将来出現しようとしている。10 年後の 2030 年代前半には、AI*（人工知能）、自動運転、空飛ぶ自動車などの本格実用化が予測されている。

・今後、デジタル技術によるサービス革新（DX：デジタル・トランスフォーメーション）によって、個人的、潜在的ニーズを満たすきめ細かなサービスの提供が可能になると思われる（例えば、自動運転の普及によって、公共交通の少ない地方都市でも移動のパーソナル化が実現する）。その結果、都市間でのサービス格差は解消に向かい、人口減が進む多自然地域でも、居住地、就業地としてのポテンシャルは高まると思われる。

・今後、各都市では、デジタル技術を活かすプラットフォーム（データ連携基盤＝都市OS 等）の整備を進めるとともに、デジタル技術の力で新たなサービスやビジネスを生み出し、地域の課題解決や魅力向上に戦略的に取り組んでいく必要がある。

３．価値創造社会の到来

・デジタル技術の進化とともに、人々の暮らし方、生き方も変化していくことが予見される。今後、AI*やロボットの普及とともに、人々が創造的な活動に従事する時間は増えていくことが予想される。一方では、デジタル技術を人々の生活の豊かさ、幸せの

追求に活用するために、人々の創造力（想像力）が今以上に重要になる。

・こうしたなか、居住地、滞在場所の選択にあたっても、生活の利便性よりもむしろ、各人の価値創造活動を支えるまち（「創造都市」「創造農村」）としての可能性が重視されるようになる。

・今後、都市空間のデザインにあたっては、まちのなかに様々な創造活動の場を生み出すとともに、様々な人たちと出会い・交流し、つながりや知的刺激を得る場や、地域ならではの本物に触れることのできる場、各人にとって心地の良いまちの居場所（サードプレイス）をつくっていくことが望まれる。

４．活動人口、関係人口*拡大の必要性

・少子・高齢化の進展により、長期にわたって我が国の総人口の減少が予想されるなか、どのように地域社会の活力を維持していくかが、今後の都市政策、まちづくりの大きな課題となっている。

・人口減少下でも活力ある豊かな社会を築くには、（現実・仮想空間における）「地域活動総量」の拡大を重視していく必要がある。すなわち、ヒトの接触・交流頻度が高まり、モノ、カネ、情報の流通・循環速度が速まる地域社会の構築が持続的発展の鍵となる。

・そのためには、社会参加率の向上や健康寿命の延伸等に取り組み、地域で活動する人口を拡大していかねばならない。また、定住人口以外で地域と関わりをもつ人々（関係人口*）を増やし、地域社会の担い手の受け皿拡大を図っていくことも必要である。今後、関係人口*の拡大に向け、開かれた地域社会（オープン・コミュニティ）の形成が重要な課題となる。

５．社会･経済･環境面での持続可能性の追求

・我が国全体が「脱炭素社会」、「循環型社会」に向けて舵を切る中、地方都市でも、環境・経済・社会の統合的向上をめざす「サスティナブルシティ」（持続可能都市）としての発展が最重要課題になりつつある。

・今後、各都市では脱炭素に向け歩いて暮らせるまちづくりを推進し、車依存から脱却するとともに、再生可能エネルギーの利用や建築物の木造化・木質化、グリーン・インフラ（都市緑化等）の整備等に取り組む必要がある。また、コンパクトな都市づくりを推進するとともに、資源利用の最適化により環境負荷の逓減に取り組まねばならない。

・一方では、持続可能な社会をめざし、リーズナブルな暮らし（「モノを持たない、お金をかけない環境に配慮した暮らし」）を送ることのできる仕組みの構築にも取り組む必要がある。都市全体でリサイクル、リユースの推進などとともに、もの、サービス、人材などを共有し利用する共有経済（シェアリング･エコノミー*）の実現にも取り組まねばならない。

Ⅱ　柏原を読み解く　―現状･課題分析―

基本構想の理念・方向性の検討にあたっては、柏原の現状や課題を多角的に把握する必要がある。以下では、まちの歴史・個性、これまでの活性化の取組、都市機能、圏域構造、市民意識、時流変化といった観点から、柏原を読み解いていく。

1．柏原というまち　－過去をたどり、まちに託されてきたものが何かを探る－

・古代山陰道の要衝であり、中世以来門前町、城下町として賑わい、発展してきた柏原には、柏原八幡宮（国重要文化財）、柏原藩陣屋跡（国指定史跡）をはじめ、100 を越える歴史的建造物が残る。市街地には、城下町時代の町割りがほぼそのまま残り、まちの佇まいに当時の面影を偲ぶことができる。

・明治期以降、柏原には国や県の機関が集中し、まちは丹波の近代化を先導する役割を担った。「**行政都市**」としての機能集積や鉄道の敷設により、柏原は丹波地域の広域拠点として、人口規模以上の拠点性を有するまちとなる。

・柏原のもう 1 つの顔が「**教育都市**」である。藩校（又新館・崇廣館)、高等女学校、旧制中学以来の学びの場としての伝統が今に続いている。その伝統は丹波の森公苑生活創造センター（丹波の森大学等を開講）にも引き継がれている。丹波の森公苑は、丹波の森づくりを担う「もりびと」を育てる学び舎となっている。

・このような近世以前の門前町・城下町、近代以降の行政・教育都市としての歴史が、柏原を特色あるまちにしている。すなわち、**「集い、交わるまち」**であり、**「学びの場」**であった柏原は、**「交流」**と**「学習」**をキーワードとするまちといえる。

・また、**「品格」**も柏原を象徴する言葉である。城下町としての矜持に加え、学びの場であることが、人々を律し、まちに品格をもたらしてきた。柏原は都市格（品格、文化力・教育力等）が都市力（経済力･規模）を上回るまちと形容してもよいかもしれない。

・基本構想の理念を検討するにあたっては、こうした**まちの DNA、アイデンティティ**を踏まえる必要がある。

2．四半世紀を振り返って　－モータリゼーションと郊外化がもたらしたまちの静かな危機－

・1990 年代以降、モータリゼーションが進行するに伴い、柏原中心市街地（＝城下町地区）はいつのまにか‘静かなまち’になっていった。郊外の国道 176 号バイパス沿いに大型商業店舗や多種多様なロードサイドストアが立ち並ぶようになると、市街地商店街では商店数が減少していった。

・空き店舗・空き家が増加するなか、1990 年代前半から城下町地区で商店街活性化事業がはじまる。その後、中心市街地活性化法（1998（平成 10）年）の施行を受け、2000

（平成 12）年旧柏原町が「中心市街地活性化基本計画」を策定する。そしてその翌年、タウンマネージメント機関（TMO）として「(株）まちづくり柏原」が誕生し、‘危機’への対応にあたる。

・まちづくり柏原では、設立以降空き店舗、古民家等のリノベーション、テナントミックスを行い、‘質’の高い飲食店舗、物販施設の誘致に成功してきた。また、同社では、丹波ハピネスマーケット等各種イベントの開発にもあたり、地域の集客力強化にも取り組んできた。景観面でも、街なみ環境整備や住宅・商店の外観修景などを進め、統一感ある街並みの形成にあたってきた。

・こうした店舗誘致やイベント開発、街並み整備は女性グループやファミリー客といった従来中心市街地への流入が少なかった層の来訪者を誘引してきたが、市街地内に回遊性・界隈性を生み出すまでには至っていない。

・市街地内の歩行者・自転車通行量や文化・交流施設利用者数は、2016（平成 28）年度の「丹波市中心市街地活性化基本計画」策定以降一時期増加傾向にあったが、その後のコロナ禍により落ち込み、同計画自体、2020（令和 2）年度をもって終了した。

・しかしながら、まちづくり柏原等による中心市街地活性化の取組は今も続いている。現在、同社では丹波市の事業委託を受けて、チャレンジ・ショップ*事業に乗り出している。これによりテナントミックスによる店舗誘致から、地域内で出店希望者を発掘・育成し、出店数を増やす能動的な戦略へとシフトしようとしている。また、商業者や職人、クリエイターのまちなかへの移住促進に向け、古民家の空き家を改修し職住一体型移住体験住宅の整備にもあたろうとしている。

・基本構想では、こうした**過去から現在に至る活性化の取組を踏まえつつ**、次なるまちづくりの方向性を示していかねばならない。

3．機能面からみた柏原　ーまちのさらなる魅力向上に向けてー

・前述したように、モータリゼーションの進展とともに、柏原では郊外への商業店舗の進出が相次いだ。全国規模のチェーン店が幹線道路沿いに立ち並び、日本のどこでもみられる光景が、ここ丹波にも出現した。

・この郊外への商業進出によって、車を利用する生活者の利便性は向上した。それによって、旧柏原町自体の人口は今日に至る間、さほど減少していない。若い世代が市内他地域から移り住んでくるため、世帯数に限れば微増傾向にあ

る。こうした傾向が続く限りは、今後も柏原交流ゾーンでも一定の住宅需要が続くと想定される。

・日常の買い回り機能が郊外に出てしまった現在に至っては、今後、城下町地区に商業機能が大きく回帰することが想定しづらく、商業系でもニッチな分野や特定の層を対象とした商品・サービスの提供など、棲み分けを考える必要があると思われる。飲食に関しては、質の高い店舗の誘致により現状一定程度郊外との差別化が図られている状況といえよう。

・現在、店舗数が限られている生鮮食料品店や、まちの居場所、サロンとしての役割を果たし、まちの回遊性を高めるカフェなどは、新たな需要を喚起する可能性がある。普段使いのまちとして欠かせない機能の充実を図っていく必要がある。

・一方、業務・文化機能の面では、依然柏原交流ゾーンは丹波市の核として求心力を有している。現在の需要動向を踏まえ、今後その水準を引き上げていくことを検討する必要がある。また、里山やオープンスペースを擁する丹波の森公苑の存在によって、余暇・スポーツ面でも新たな可能性を有している。

・まちの交流機能という面では、潜在的な需要はあると思われるものの、現状では十分とはいえない。特に、ホテル等の滞在施設、おもてなしの場がないことが、ハレの日のまちとしての要件を欠いていると言わざるを得ず、新たな施設整備が期待される。

・このような状況を踏まえると、柏原交流ゾーンでは、**業務・文化機能の高度化・多様化、住宅、余暇、交流機能の開発整備**とそれらに**付随する商業機能の充足**と、**バランスのとれた複合的な整備**が期待される。

・柏原交流ゾーン内には、柏原南用地のほかにも、旧日赤病院跡地、旧柏原支所庁舎（かいばら一番館）など、今後活用が期待されている**未利用地・施設**が存在する。基本構想においては、これらの**用地・施設間の機能連携やその一体的活用**について検討する必要がある。

4．圏域都市構造からみた柏原　ー独自のエリア、モデル都市形成へー

＜都市計画マスタープランにおける柏原の位置づけ＞

・丹波市域のまちづくりの目標や土地利用のあり方などの基本方針を示した「丹波市都市計画マスタープラン」（令和 4 年 9 月改定）では、**柏原―氷上―春日にまたがるエリアを市の中心部**と位置づけている。

・このうち、**柏原を行政ゾーン**、柏原―氷上の境界部を商業業務ゾーン、氷上を文化ゾーン、春日を交流ゾーンと位置づけている。すなわち、丹波市は**準中心が分散する都市圏域（多心型構造）**と形容できる。

・マスタープランでは、柏原地域に関し **JR 駅周辺での拠点整備、中心市街地の活性化、都市機能の充実・強化などによる拠点性の向上**が謳われている。

＜新しい都市像の形成へ＞

・今後を展望すると、今後東播丹波連絡道路の延伸、北近畿自動車道の但馬内延伸に伴い、氷上、春日方面の自動車交通量は増加し、商業、交流面での機能重心は市北部へとさらにシフトしていく可能性がある。

・こうしたなか、城下町地区、丹波の森公苑等からなる柏原交流ゾーンは、交流やにぎわいの創出に向け、丹波で他にはない、**独自のエリア**として存在感を高めていくことが期待される。

・すなわち、**鉄道・公共交通利用のまちづくり、歩いて暮らせるまちづくり**を推進し、丹波地域における**サスティナブルシティ**の実現を図るとともに、新しい働き方・暮らし方を希求する人々を受け止め、そのライフスタイルの実践空間となることが期待される。それは、自動車利用の広域生活圏のオルタナティブとして提示されるべきものである。

・基本構想の理念検討にあたっては、柏原交流ゾーンを **21 世紀の我が国地方都市のモデル**となるような**多様なライフスタイルの創造をめざす人々、「次世代活動・交流層[1]」を引きつける求心力のある都市**として描くべきである。「次世代活動・交流層」として期待される人々と地域密着層や観光・来訪層が、交流・連携を進める中で、共に新たなライフスタイルを創造・創発していくエリアとなることを目指す。

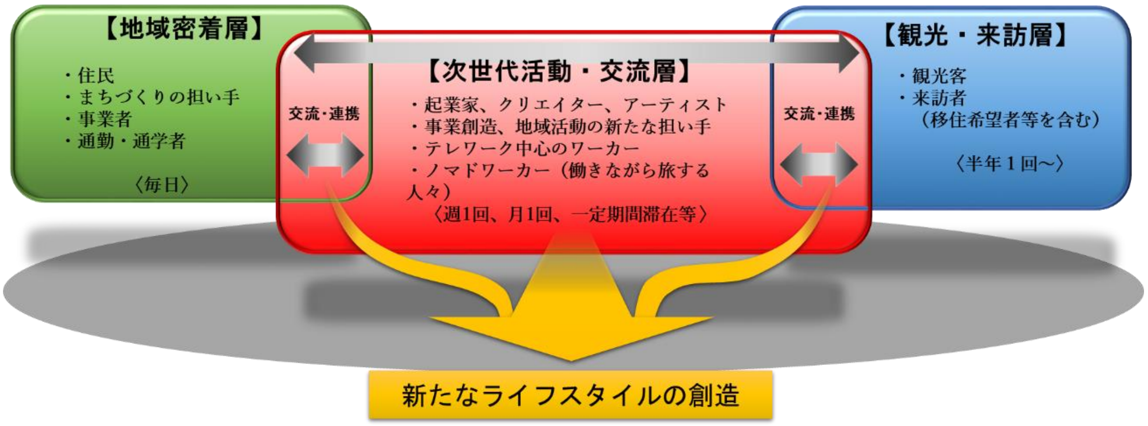


図　柏原交流ゾーンに集い、交わる人々
による新たなライフスタイルの創造

[1] ポストコロナ社会、超スマート社会*に対応し、時間や場所にとらわれない働き方、暮らし方（テレワーク*、ワーケーション*、ノマドライフ等）を志向する人々。しごとや活動に応じて複数の住まいを柔軟に使い分ける（多拠点居住）、あるいは定住場所を持たず各所で滞在・活動(ノマドライフ)するなど、自由で、多様なライフスタイルを実践しようとする人々。IT 業務や創作活動（デザイン、アート）等に従事し、時代感覚に富み、教育や食、デザイン等への感度の高い人々。この次世代活動・交流層が触媒となって、新たなつながりや交流が育まれる可能性が期待されている。本書独自の定義。

５．市民の声を聴く　－市民のニーズに応えるには－

・基本構想策定にあたり、柏原地域の住民をはじめ様々な市民の声を聴いたところ、**集まる場所、たまり場、居場所**を求める声が共通して多かった。まちにいて時を過ごし、人と交わりたいと思うが、そのための空間がなく、まちで時間を消費できないでいることが課題として明らかになった。

・施設としては、比較的若い世代の意見を多く聞いたため、多様なライフスタイルを支える**住まい**のほか、**子供連れが楽しめる施設**（動物園＋遊具公園等）、**アーバンスポーツ施設、高校生の居場所づくり、女性の癒やしの場**（お洒落なカフェ等）などを求める声が多く聞かれた。

・また、**IT 関連施設**や**デジタルインフラ**の整備を求める声もあった。このほか、**現在の丹波にはないようなショップやシンボリックな構造物**など、他所に自慢できるプライドの源泉になるようなものを望む声も聞かれた。

・柏原駅南用地については、**丹波の文化、農産物、伝統工芸、木工クラフト等の展示（ショーケース）や商品開発、プロデュース、発信の場**と位置づける意見や、**周囲の里山や丹波の森公苑への入り口（ゲートウェイ）機能**を持たせる意見などが提案された。

・また、駅の南北、城下町地区と柏原駅南用地、丹波の森公苑を**物理的につなぐ通路等の開設**や**交流ゾーン全体での新たなサービス提供、イベントの開催**などの提案もあった。

・上記の意見などを踏まえると、柏原交流ゾーンでは、子ども、若者から現役世代、シニアまで**多世代の利用**に供する施設整備を推進するとともに、丹波の玄関口として、**訪問者向けの集客・滞在施設**や**訪問者と地元の人々との交流施設**なども検討していく必要がある。

・また、丹波の玄関口として訪問者に丹波らしさを伝え、住む人にとっても居心地の良い空間とするには、空間や商品等を含めてトータルでまちをデザインしていく発想が重要である。

・なお、検討にあたっては、市民を施設・サービスの**利用者**としてだけでなく、施設の維持管理、イベントの開催にあたる**担い手**として捉える視点も重要である。

6．時流変化を受けて　－地方回帰の波、脱炭素社会の到来－

・2022（令和 4）年は、丹波地域にとって潮目が変わる年となった。**丹波市の社会増減は市制開始以来、初めてプラス（社会増）**に転じた。

・その背景には、言うまでもなく、コロナ禍のもとでの**地方回帰現象**がある。丹波市では、コロナ禍前に比べ、移住者は 3 倍以上に増加し、流入人口が拡大している。その大半は、50 歳代以下の現役世代である。

・新しく来た移住者がこの地に求めているものは何であろうか。恐らく共通しているのは、丹波ならではの**自然（農）とふれあえる暮らし**であろう。

・その一方で、**自分らしい個性的なライフスタイル**の実現も、移住者が新天地へ移住した大きな理由の 1 つであろう。実際、移住者の多くが、自分のやりたい暮らし・しごとの実現に向け、起業に挑戦している。

・また、移住しなくても、二地域居住、週末居住、一時滞在、リピート滞在しながら丹波と関わることで自分らしいライフスタイルを実現しようとしている人たち（**関係人口*：潜在的移住者層**）もいる。今後その数も増えていくものと思われる。

・こうした移住者や関係人口*のニーズに応え、**多様なライフスタイルの選択が可能なまちづくり**を推進していく必要がある。教育や食、デザイン等への感度の高い「次世代活動・交流層」を惹き付けるため、柏原の歴史文化資源を活かして創造都市としてのまちづくりを推進することも期待される。

・他方では、様々な経験・スキルを有する移住者、関係人口*が、地域で思う存分チャレンジ、活躍できる環境を整備し、**移住者や関係人口*の力を地域の力**にすることも重要である。

・一方、**脱炭素社会の到来**という意味でも、2022（令和 4）年は丹波市にとって節目となる年であった。同年 12 月 27 日、丹波市は「**丹波市ゼロカーボンシティ宣言**」を行った。そして、食品ロス削減、節水、節電、５R*、脱炭素製品・再生可能エネルギーの利用、エコな移動（徒歩・自転車）等、8 項目にわたるアクションプランを公表した。

・既述したように、駅を中心にコンパクトな市街地が拡がるまち柏原は、持続可能なまちづくりの実践という点で、適地ともいえる環境を有している。

・この環境のもと、かつては丹波の近代化を先導し、過去四半世紀以上にわたって丹波の森づくりを主導してきたまち柏原が、**脱炭素に向けた持続可能なまちづくり**において、再び時代のフロントランナーとして歩みはじめることが期待されている。

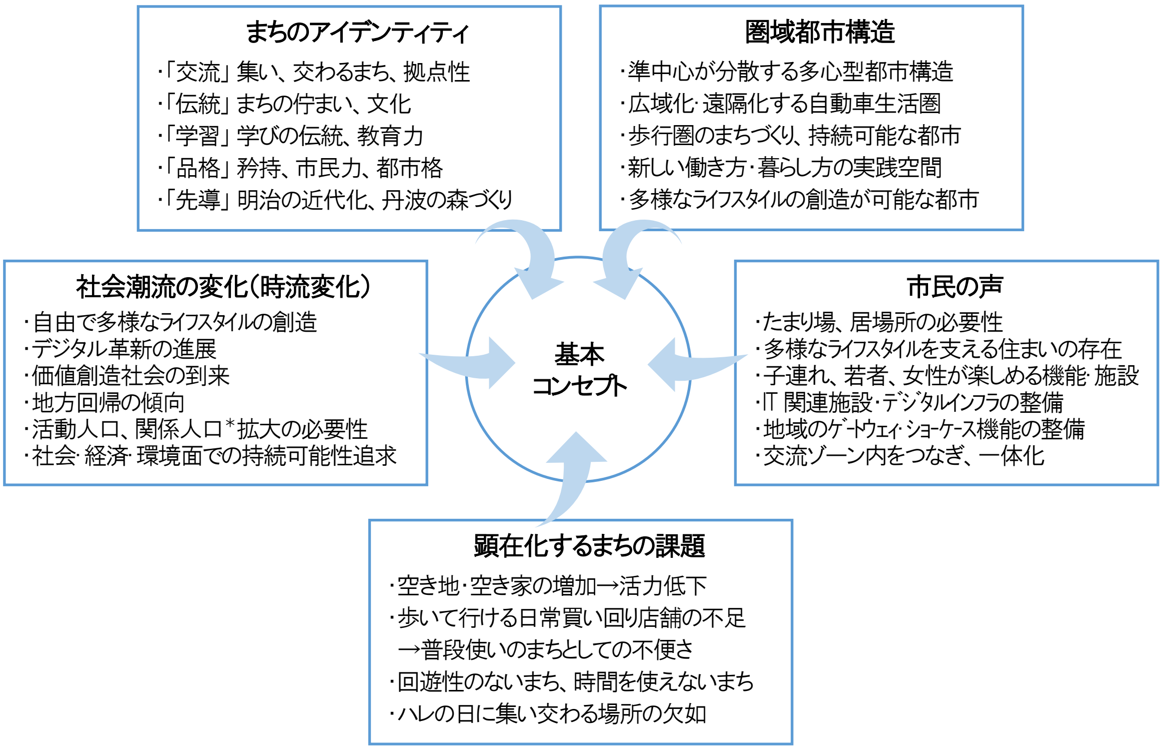
・基本構想では、こうした時流変化－地方回帰の波、脱炭素社会の到来－のもとで、柏原が**時代のフロントランナーとして進むべき方向性**を明らかにしていく。

Ⅲ 基本コンセプト

以下では、基本構想の基本コンセプトの組み立て方法、検討にあたっての視点について記したのち、メインコンセプトと３つのサブコンセプトを提示している。そのうえで、整備後の全体イメージを描いている。

Ⅲ-１ コンセプトの組み立て、デザイン

・これまでみてきた新しい社会潮流（時流変化）、まちのアイデンティティ・DNA、顕在化するまちの課題（都市機能等）、圏域都市構造、市民の声等に基づき、コンセプトを組み立てていく



Ⅲ-２．コンセプト検討の視点　―双眼的・複眼的・多元的・統合的視点―

・**伝統と革新**―まちのアイデンティティ・DNA（不易）を核に、新しい社会潮流（流行）等を踏まえコンセプトを検討。

・**広域と狭域（広域圏と歩行圏）**―丹波地域、丹波市全域のなかでの柏原、市街地居住者の柏原。双方の視点を踏まえてあるべきまちの姿を考える。

・**定住と交流（定住人口と関係人口*）**―住民、滞在者、訪問者それぞれのニーズに応えるまち、両者が交わり、互いに刺激を得る場としてコンセプトを検討。

・**多様性と包摂**－人々のライフスタイルの多様性を尊重しつつ、あらゆる世代、あらゆる立場の人にとって居心地のよいまちとしてめざすべき姿を考える。

・**仮想と現実**―双方の空間の融合を前提として、今後のまちづくりのあり方やコンセプトを提示。

Ⅲ-３ 基本コンセプトの提示

＜メインコンセプト＞

「古くて懐かしくも、新しいまち KAIBARA　－時空をデザインする価値共創都市をめざして－」

- 古からの「集い、交わるまち」、「学びのまち」としての歴史・伝統を継承しつつも、時代潮流の変化のなかで新しい暮らし方、働き方の実現が可能な都市をめざします。
- この新しいまちは、21 世紀社会に相応しい多様な暮らし方、働き方の価値を創造・発信し続けるまちです。古来より知恵が生まれ、練られる場であった歴史を継承し、価値創造に挑戦するすべての人をあたたかく受け容れ、新しい知恵の創造、イノベーションの創出に取り組んでいきます。それにより、DX や AI*の活用・導入が進み、地場産業が活性化しています。
- 柏原は多種多様な新たな人と出会い、交わり、学び、探求し、新たなコトにチャレンジするまちであり、人々に刺激を与える、知的好奇心に富んだまちになります。「次世代活動・交流層」が集積し、丹波という地域を越え、広域的に新しい人の流れを生み出す磁場として発展するまちになります。
- 「デザイン」がこのまちの発想の原点となります。街並み、建物といった空間だけでなく、文化、暮らし方、エリアマネジメントなどソフト面でも、デザイン感度の高いまちをめざします。デザイン力を育むのも、このまちの役割の１つです。
- 新たな暮らし、働き方のスタイル、価値を生み出すこのまちには、古くて懐かしい本物の丹波、日本も残っています。丹波のショーケースであるこのまちでは、丹波らしい人々、もの、生活文化に出会うことができます。
- 誰をも受け入れ、包み込む懐の深さがこのまちの特色です。このまちでは、誰しもが程良さ、居心地の良さを感じることができます。
- このまちの伝統（柏原らしさ･丹波らしさ）と新しいチャレンジ、試行錯誤のなかから、世界と分かち合える 21 世紀の普遍的な暮らし方（持続可能な自律分散型居住スタイルなど）を生み出し、提案していきます。
- 柏原は、かつて明治の近代化を先導した地であり、先導的な持続可能な地域づくりである「丹波の森づくり」を四半世紀にわたって主導してきた地です。すなわち、先導性もまた柏原の DNA の１つです。柏原はこの伝統を引き継ぎ、再び丹波の次代を切り拓くミッションに挑みます。

（１９世紀）		（２０世紀）		（２１世紀）
門前町・城下町	→	行政・教育都市	→	**価値共創都市**

＜サブコンセプト＞

「つながり」、「心地よさ」、「挑戦」
－３Ｃ＝Connected, Comfortable, Challenge－

[つなぐまち、つながるまち－コネクティッド・シティ KAIBARA－]
～柏原は時空を超えて様々なものをつないでいきます～

- **古来より交わるまちであった柏原は、21 世紀においても様々な人をつなげ、異質な出会いを演出するまちをめざします。**

  －若者と現役世代、シニアがまちへの想いや「居場所」を共有し、交流、相互応援
  －定住者と滞在者、訪問者が交わるまち
  －「これまで出会ったことのない者同士がつなぐ」（シリ丹バレー構想の基本コンセプトの具現化）

- **周囲を里山に囲まれた柏原は、自然と人間をつなぐ空間をめざします。**

  －大都市と多自然地域の中継ポイント、都市と自然をつなぐゲートウェイシティ
  －丹波の森公苑、里山への入り口

- **歴史的建造物がまちを彩る柏原は、伝統のうえに新しいライフスタイルの創造をめざす過去と未来がつながった都市をめざします。**

  －近世、近代、現代、未来（の空間と精神）が共存するまち
  －過去の遺産を活かす、伝統を革新のシーズにするまち

- **柏原は新しい暮らし方・働き方の実践の場となり、しごととくらし、生活と観光がつながった新しいライフスタイルを創造するまちをめざします。**

  －暮らしの場が仕事場に、街中はどこもコワーキングスペース*
  －日常の暮らしそのものが観光（コト体験）のディスティネーション（目的地）に

- **柏原は仮想と現実の双方からアクセスできる、仮想と現実がつながったまちをめざします。**

  －まちの仮想化（ヴァーチャルタウン柏原）、仮想モールにはチャレンジ・ショップ*、ポップアップ・ストア*が出店
  －関係性のコミュニティ（定住人口＋関係人口*）がともにまちをデザイン（メタバース、アバター）

[程良さが心地よいまちーウェル・バランスドシティ KAIBARAー]
～柏原は滞在するすべての人に居心地の良さを提供します～

- **まちの佇まい、風情が心地よさをもたらすまちであり続けます。**
  －程良さを生み出す落ち着きある街並み、景観
  －ゆったりとした時間の流れ、癒やしをもたらす空気感
  －マイルドな気質、人々の寛容性、ほどほど（中庸）を知る人々
- **柏原はまちなかに自分の居場所がある、心地よいまちをめざします。**
  －時間消費のしやすいまちに
  －誰もが自分のまちの居場所、たまり場（サードプレイス）がある
- **柏原は食・住・遊のバランス、仕事と生活のバランスのとれたまちになることで、程よさが心地よいまちをめざします。**
  －歩いていける範囲内で食・住・遊のスポットをみつけることができる
  －どこでも働ける、まちごとコワーキングスペース*
- **周囲を里山に囲まれた柏原は、自然とのふれあいによる心地よさを感じるまちをめざします。**
  －自然と共生した暮らし
  －市街地に住まうも、身近な自然（里山）に分け入る暮らし
- **健全なまち柏原は、心身の健康面からも心地よいまちをめざします。**
  －様々なスポーツ・余暇施設、学習施設があり、心身が健全になるまち
  －子供たちの遊び場がある。子供たち同士が、子供たちと若者、大人たちが交わり話しあえる場がある

［挑戦を支えることで成長し続けるまちーチャレンジシティ KAIBARAー］
～柏原は学び続ける、行動し続ける人たちを応援します～

- **柏原は、市民の主体的な活動を支援するまちであり続けます。**

  －市民の活動スペースが至るところにあるまち
  －市民がまちのデザインに参加（プレイスメイキング*の実践）

- **柏原は、起業や創作活動を志す人を後押しするまちをめざします。**

  －起業や創作活動を志す人の小さなスタートを後押し
  －小さなスタートが連鎖し、やがては大きなビジネス、活動へと発展

- **柏原は、事業創造、起業の拠点をめざします。**

  －新しいビジネスコミュニティ（事業共創コミュニティ）の形成
  －シリ丹バレー構想の本拠地として丹波地域全体の地域発イノベーションを促進

- **柏原は、多様な学びの場を創造し人々の学ぶ意欲、向学心に応えるまちをめざします。**

  －まち全体で多彩なカリキュラムを提供（たんばの森大学、マイクロバウハウス*（p.20 参照）他）
  －リスキリング（職業能力の再開発）の機会提供：だれもが創造的人材になれるチャンスのあるまち
  －DX や AI*の活用を学べる場

- **柏原は最先端のスマート技術基盤を整備し仮想空間で活動しやすいまちをめざします。**

  －兵庫情報ハイウェイ*への接続、ローカル５G*の拠点
  －まち全体が仮想コミュニティ化し、現実、仮想空間の双方で起業などのチャレンジが可能に

Ⅲ−４．将来イメージ

- ２０３X 年。柏原交流ゾーンの開発整備は完了。柏原駅の連絡通路を通って城下町地区と柏原駅南用地、丹波の森公苑の間を行き来する新たな人の流れが生まれています。丹波の文化創造発信拠点である柏原南用地の施設や丹波の森公苑は、市の内外から来る訪問客・滞在客で賑わいをみせています。
- 柏原駅南用地や城下町地区には、若い世代を中心に域外から人が移り住んできています。大都市で働いていた地元出身者がここに戻りテレワーク*で仕事をし、域外の人々（関係人口*）がここを二地域居住の拠点にして丹波地域で活動しています。
- 柏原駅南用地のオフィス棟、城下町地区の古民家、丹波の森公苑施設などに様々な活動スペースができ、行政機関の職員、地元企業の社員らも、それらのスペースを活用して仕事を行うようになっています。学生たちも、その場を利用して地域のなかで活発に活動を行っています。
- 多様な活動スペースのある柏原交流ゾーンには、市の内外から起業をめざす人や創作活動に取り組む人たちが、たくさんやって来て新たなテクノロジーやデザインを学んでいます。丹波の森公苑にある支援機関などを介して、起業者・起業志望者間、クリエイター間の交流も、盛んに行われています。
- そうした新たな交流、つながりの中で、丹波の資源を活かした新事業が生まれています。デザイン性に優れたショップや空間、メイドイン柏原・丹波の優れたデザインの商品が、さらにこの地へと人々を惹き付ける誘因となっています。
- 城下町地区では、世代を超えた交流の場、まちの居場所がつくられ、いろいろな活動が行われています。その場を舞台に、住民間だけでなく、住民と滞在者、訪問者の新たなつながりも生まれています。
- 城下町地区では、歩いて暮らせるまちづくりが進められています。街路整備のほか、ポケットパーク等の整備が進められているほか、EV カート等での移動支援が行われています。
- 柏原交流ゾーンでは、専用回線の整備がなされ、城下町地区と柏原駅南用地、丹波の森公苑ではどこにいても高速、大容量の通信が可能になっています。
- 持続可能な都市をめざし、ゾーン全体で再生可能エネルギーの活用や資源循環等に取り組んでいます。

Ⅳ エリア別構想

柏原交流ゾーンを構成する３つのエリアそれぞれのコンセプト、整備・再整備の方向性を示すとともに、導入が想定される主な施設・プログラム等について記している。

Ⅲ-１ 柏原駅南用地　－NEW KAIBARA－

１．エリアコンセプト

- **21 世紀社会に相応しい新しい働き方、暮らし方が可能な空間＜FRONTEDGE KAIBARA＞**
- **丹波市、丹波地域の玄関口であり、その魅力を発信するショーケース＜CHATTA（ちゃった） KAIBARA＞**
- **丹波の木のぬくもり、木のある暮らしを体感する場＜WOODY KAIBARA＞**

２．整備の方向性

- 居住者、滞在者、訪問者と、**様々な人が集い、交わり、学び、新たな価値、文化を創造し、イノベーションを創出する空間**として整備を進める。**「次世代活動・交流層」が集積し、広域的に新しい人の流れを生み出す磁場**となるようなデザイン性に優れた空間形成、施設整備を行う。
- 子どもから若者、ファミリー層、シニアまで、**あらゆる世代が憩い、佇み、活動する場**とする。
- 多様な人々のニーズに応えることができるよう、**多目的利用、柔軟な利用が可能な施設**として整備を進める。
- **新しい柏原、新しい丹波を象徴する地区**として整備することとし、これまでの丹波地域にはない新たな施設やデザイン性の高い、シンボリックな構造物の整備を進める。
- **丹波市、丹波地域の産物を展示・発信、販売する施設**を整備する。**丹波産木材を使って建築物を木質化**することで、木のある暮らしの魅力とともに、地域の木材関連産業の技術力を発信する。
- **丹波の玄関口に相応しい宿泊・滞在・交流施設**の整備を進める。施設は多様な滞在ニーズに応えるとともに、出会い・交流の場やおもてなしの場として機能するものとする。
- **丹波の森公苑のゲートウェイ、ブランチとしての機能**を有するとともに、**城下町地区と丹波の森公苑をつなぐ結節点**としての役割を担う。旧赤十字病院との機能面での連携や一体的開発を推進。

3．導入が想定される主な施設・プログラム等

[芝生広場]

子どもからお年寄りまでが集い、憩い、なごむスペースとして芝生広場を整備。芝生とウッドデッキからなる広場はミニ・コンサート、マルシェ、街中キャンプ、焚き火会など様々なイベントに活用。

[木のクラブハウス（交流スペース＆デザイナーズ・ホテル「木の迎賓館」）]

木を活かした外観や木質化された内装において高いデザイン性を持ち、まちのクラブハウス的な役割を果たすホテル。カフェ･ダイニングを含めて、様々な交流やおもてなしの場として利用され、柏原交流ゾーンの迎賓館としての役割を果たす。

[集合住宅・滞在型施設（木造中層建築物）]

分譲・賃貸住宅と短期滞在（お試し滞在）施設からなる木造中層建築物。柏原交流ゾーンのランドマーク的存在として整備。コンシェルジュ・サービスによって、居住者・滞在者の生活を手厚くサポート。施設内に移住希望者向け、お試し住宅も確保。

[マイクロバウハウス*（芸術工芸学校）]

丹波の工芸（丹波布等）、木工クラフト等をはじめ、工芸、デザイン、美術、建築、デジタルアートなどを学ぶことのできるアートスクール。生涯教育、職業教育（リスキリング）の場として開校。機能性とともに、芸術性・デザイン性を重視した施設（木の殿堂）として設計・施工。木工おもちゃのプレイルームや木工作家による作品を展示・陳列するアートギャラリーを併設。

[木のハコ・オフィス（多目的ワークスペース）]

木製モジュール建築によるオフィス。企業のサテライト・オフィス、大学のサテライト・キャンパス、テレワーク*・コワーキングスペース*施設、会議室、講義室、展示室など、様々な用途に利用可能な施設。

[モデルハウス（丹波型環境共生・健康住宅）]

丹波産木材を活用して、丹波地域の風土と調和した健康的で住みよい省エネ・長寿命住宅を開発し、そのモデルハウスを整備。

[サロン・デ・デザイン（市民主体の学習交流サロン）]

木のハコ・オフィスなどを利用して、芸能文化、料理、服飾デザイン、園芸など、生活を豊かにする様々な知識・スキルを持つ市民が互いに講師となり、生活デザイン力を高める講座を日常的に開催。交流活動もあわせて実施。

[エキヨコ（商業・物販・飲食施設）]

駅（もしくは駅連絡橋）に直結した商業・物販施設。カフェ、レストラン、日用品を扱う店舗のほか、ユニークな品揃えの個性派ショップや丹波産品を取り扱うセレクトショップ、農産物直売所等が入居したミニモール。

[シンボルタワー（木製展望台）]

丹波産木材で造られた、柏原市街地を一望できる木製展望台（新太鼓櫓）。

［IT 特区・スマート KAIBARA（Local 5G*拠点）］

城下町地区及び柏原駅南用地の一団の用地を IT 特区に位置づけ、Local 5G*の利用が可能な施設を整備。Local 5G*の導入にあたっては、市街地にアクセスポイントのある兵庫情報ハイウェイ*を利用し、安価に大容量通信を行える環境を整備。

施設には、画像処理、動画作成等にあたるクリエイターを誘致するほか、オンライン診療機関や無人植物工場など、高速・大容量通信を必要とする事業者や施設・機関の入居を促進。

［ミニ・トランジットモール（発着場）］

路線バス、デマンド型乗り合いタクシー*、丹波の森公苑、城下町地区へのグリーン・スローモビリティ*の発着・乗り換え場を柏原南用地に整備。

4．想定される将来のエリアの姿（未来の利用者の声–シナリオライティング）

20代　男性
システムエンジニア
丹波市出身
Uターン

テレワーク*には最高の場所

関西の大学を卒業後、大阪のIT会社に就職しその郊外に居住していましたが、現在はここＮＥＷＫＡＩＢＡＲＡの集合賃貸住宅に住んでいます。

週1回特急で大阪に行き、取引先との打ち合わせを行っていますが、それ以外の平日は自宅などで仕事をしています。ＮＥＷ　ＫＡＩＢＡＲＡや市街地にある、いろいろなタイプのコワーキングスペース*を気分転換によく利用します。ここはテレワーク*には最高の場所だと思います。

週末は青垣町の実家に帰り、農業の手伝いをし、親孝行しつつ土に親しんでいます。

40代　女性
主婦
Ｉターン
丹波市在住

子育てにちょうどいい

2000年代初めに大阪の企業に就職しマネージャーまで任されましたが、不妊治療のため退社。当時は今のように不妊治療しながら働ける環境は整ってなくて・・・。その後娘をさずかりましたが、パートでは保育園にいれられず、コロナを機に夫が完全リモートワークになったこともあって、娘が小学校に入る前に友達の住む丹波市に移住しました。

ＮＥＷ　ＫＡＩＢＡＲＡには丹波の森公苑のような子どもが思いっきり走り回ることができる大きな芝生広場もあれば、ママ友とランチできるおしゃれなカフェも多いし、近所の人も子どもを気にかけてくれて、とても心地よいです。今は、木のハコ・オフィスで起業に向けて勉強中です。まさか自分が起業する気になるとは！

60代　男性
大学教授
神戸市在住

滞在・交流を楽しみにしています

丹波の森大学で講義を行ったり、学生とともにここでフィールド調査をしたりしています。以前は日帰りでしたが、今はなるべく宿泊することにしています。それはもちろん、「木の迎賓館」ホテルができたから。木の匂いとぬくもりの感じられる部屋でゆったりと過ごし癒やしを得ています。ただ、最近こちらに来る回数が増えてきたので、NEW KAIBARAの集合住宅に1室借りることも検討しています。滞在時の楽しみはやはり食事と交流です。ホテル周辺のレストラン、バーで、丹波産の食材を使った郷土料理や日本酒に舌鼓みを打ちながら、丹波の皆さんと懇親を深めています。

70代　女性
丹波市内
在住

孫と楽しいひととき

今日は孫2人を連れて、NEW　KAIBARAに遊びに来とります。昼間は丹波産木材をつこうたモデルハウスを見さしてもらった後、マイクロバウハウス*のプレイルームに行って、孫たちも木のおもちゃで遊ばせてもろたんです。

夕方になって、エキヨコにある丹波初出店の洋食屋さんで早めの晩御飯を食べ、夜は芝生広場でミニ・コンサートと焚火イベントを楽しませてもらいました。

私も孫らも大満足の一日となりました。若い人やら都会からの人がよ～けおって活気のある場所やね。次は1人で来て、森の迎賓館でアフタヌーンティーを楽しんで、展示してあった木工作家の作品をじっくりと鑑賞したいと思っとります。

Ⅳ−２　丹波の森公苑　−HILLSIDE KAIBARA、TAKADAI KAIBARA−

１．エリアコンセプト

・新しい丹波の暮らしをデザインする知識創造拠点＜KNOWLEDGE KAIBARA＞
・新しい余暇・スポーツの楽しみ方を提案する余暇創造拠点＜FUN KAIBARA＞
・里山の営みを五感で感じることができる、都市と自然をつなぐ空間＜GREEN KAIBARA＞

２．整備の方向性

・文化・生涯学習活動にとどまらず、知識創造から事業創造、余暇創造まで、**あらゆる創造活動の拠点**として機能向上を図る。

・**丹波の森づくりの拠点**として、持続可能な地域づくりについての**研究・実践活動を推進**するとともに、地域発イノベーションの創出をめざす**シリ丹バレー構想のヘッドクォーター**として**多様な事業活動を促進**する。

・若者、関係人口*等にアウトリーチ（働きかけ）を行い、活動への参加者（公苑利用者）の裾野拡大を図るため、**丹波の森公苑の活動の仮想化**を図る。

・子どもから若者、ファミリー層、シニアまで、**全ての世代の人が学習、余暇・スポーツを楽しめる場**として魅力向上を図る。

・里山へのアクセス向上と里山体験プログラムの内容充実を図り、より多くの人に**里山に入り、里山で学び、活動する機会**を提供する。

３．導入が想定される主な施設・プログラム等

［ナレッジ柏原・森のナレッジサロン］

生活創造センターを知識創造拠点（ナレッジ柏原「長屋門ビレッジ」）としてリニューアル。一部をシェアオフィス*、コワーキングスペース*として活用するほか、事業創造、価値創造に向け、市民起業家、社会的起業家が集い、交流する「森のナレッジサロン」）を設置。

［ヴァーチャル「丹波の森公苑」］

インターネット上の仮想空間（メタバース）にヴァーチャル「丹波の森公苑」を開設し、丹波の森公苑での学習活動、知識創造活動を現実・仮想空間の双方にわたって推進。丹波の森大学もオンラインで受講可能となり、国内外から受講生を募集。

［森のビジネスパーク］

2023（令和 5）年 4 月に公苑内にオープンするコワーキングスペース*、里山スクエア（仮称：現アトリエ棟）周辺に、テレワーク*、ワーケーション*、企業研修の場としてツリーハウス・オフィス等を、民間活力を活かして整備（森のビジネスパークと旧柏原病院跡地方面を結ぶ新たな遊歩道の整備も検討）。

［森の文化体験館・縄文の森］

丹波縄文の森塾のプログラム内容をベースに、子どもから大人までが、自然とつながっていた古代の暮らしを学び、楽しめる施設を設置するとともに、縄文時代の丹波の植生を再現した森を整備。

［丹波の森探求学習センター］

自然・生き物や暮らしをテーマとした子供たちの探求学習、アクティブ･ラーニングを支援するセンターを開設。

［アーバンスポーツ・ニュースポーツ系施設］

スポーツクライミング、スケートパーク（B3 スポーツ）等の施設を整備。オープンスペースで、ニュースポーツのイベントを開催。

［昆虫館・動物ふれあい広場］

国蝶オオムラサキをはじめ丹波の昆虫が生息するドームやかつて暮らしのなかで飼っていた動物たち（やぎ、羊、馬など）にふれあえる広場を設置。

［プレイスメイキング*の実践］

公苑内のオープンスペースをプレイスメイキング*の場として開放。その場で、作品展、文化イベント、コンサート、マルシェ、ガーデンショーなど、市民、地域団体、事業者等の共創により、様々なイベントを開催。

［里山シャトルの運行（柏原駅南用地～公苑内里山奥）（EV トゥクトゥク、EV カート）］

城下町地区、柏原駅南用地から公苑内の里山の奥まで往復する里山シャトルを定期運行。里山のエキチカ化を実現。

4．想定される将来のエリアの姿（未来の利用者の声−シナリオライティング）

40 代 男性
会社員
大阪市在住

自然のなかで新しいアイデアが生まれる－ワーケーション*利用のススメ－

関西の大手企業に勤めています。会社からの勧めで、週末からワーケーション*でここに来ています。機能は午前中、丹波の森公苑のコワーキングスペース*「里山スクエア」で、プロジェクト企画案を練り、午後は公苑内の里山を歩いて、景色や生き物とのふれあいを楽しみました。森の中を歩いている途中に新たなアイデアが次々と浮かんできたので、忘れないようにと、夕刻、早速企画案を仕上げてしまいました。

今、ＮＥＷ ＫＡＩＢＡＲＡに滞在しています。のんびり走る里山シャトルのおかげで、ゆったりとした気分で公苑まで来られるのがいいですね。帰ったら、同僚にもここに来ることを勧めます。

30 代　女性
主婦
丹波市在住
Uターン

ママも子どもも輝く場所

大阪の企業で勤務していましたが、出産を機に仕事をやめ、地元丹波市で暮らしています。

子どもは、丹波の森探究学習センターや昆虫館・動物ふれあい広場がお気に入りで、豊かな自然に触れ、学べる環境で子育てができ、満足しています。

丹波の森公苑では作品展やマルシェがよく行われていますが、似た境遇のママたちの活躍をみて、最近、私も趣味のハンドメイドを仕事にしてみたいという気持ちが湧いてきました。子どもがもう少し大きくなったら、子どもを縄文の森塾に入れ、私は森のナレッジサロンに通いたいと思っています。

40 代　男性
会社経営者
丹波市在住

アイデアが飛び交う、知的刺激に満ちた空間です

シリ丹バレーのプロジェクトに参加してから、日常的に丹波の森公苑を利用するようになりました。メンバーとの打ち合わせなどにナレッジ柏原を使わせてもらっています。ナレッジ柏原の名前に違わず、とんがった個性派人材が内外からこの場に集まってきているので、やる気と刺激をもらい続けています。

今、丹波産木材で制作したモダンで機能的な家具を地域ブランド化しようとしているのですが、ナレッジ柏原や NEW KAIBARA のマイクロバウハウス*に出入りする木工作家やクリエイターの人から、いろいろいいアイデアをもらっています。この間ここにワーケーション*に来た大阪の百貨店のバイヤーの人からも、酒を酌み交わしもって、こっそりと新しい販路拡大のコツを伝授してもらいました。本当に仕事がはかどる場所ですよ、ここは。家族には遊んでるようにしか見えないかもしれないけどね（笑）。

20 代　女性
会社員
神戸市在住

この場所の仲間とイベントに挑戦

神戸市内の企業に勤めています。最近、柏原でカフェを開業した友人に誘われて、丹波地域に足を運ぶようになりました。ここ丹波の森公苑は、都市部にはない自然環境があるし、里山スクエアには、多種多様な人が集まっているので、いろいろな刺激をもらうことができています。

最近、ここでできたコミュニティの人たちと丹波の森公苑でイベントを開催したいねと話し合っています。これから、ネットなどでやりとりを重ねながら、プレイスメイキング*の実践やアーバンスポーツ・ニュースポーツ系施設の活用により、都市部ではできない丹波ならではのユニークなイベントを企画し、その実現に向けさらに仲間を増やしていきたいと考えています。

Ⅳ−３ 城下町地区 －OLD KAIBARA－

１．エリアコンセプト

・誰もが自分の居場所のある、安らぎに満ちたまち、柏原＜HOMETOWN KAIBARA＞
・賑わいが戻り、絶えずどこかで人の話し声が聞こえるまち、柏原＜REBORN KAIBARA＞
・街中で小さな挑戦ができるまち、柏原＜CALLENGE KAIBARA＞

２．整備の方向性

・まちの歴史遺産の未来への継承に向け、**歴史的建造物を保全**し、その魅力の維持・向上に向け**街並み景観の整備**を推進する。

・空き家を有効利用し、様々な人々のニーズに応える**多様なまちの居場所**（たまり場、ふれあい・交流の場等）**の創出**をめざす。

・まちなかの様々な施設・建屋に執務環境を整備し**まち全体をコワーキングスペース*化**するとともに、空き家・空き地利用を促進し、多くの人が**起業や創作活動などにチャレンジできる機会**を提供する。

・まちのそこかしこで、伝統工芸から木工デザイン、モダンアートまで、**様々な芸術にふれることのできるまちづくり**を推進する。

・古い市街地に**最先端の情報通信基盤を整備**することで、新しい人の流れを創り出すとともに、内外からの投資を促進する。

・街中をゆっくりと歩ける、まち歩きを楽しめる、**歩いて暮らせるまちづくり**を推進する。

3．導入が想定される主な施設・プログラム等

[「まちの居場所」づくりプログラム（プレイスメイキング*の推進）]

提供可能な市街地の公共空間、空き地、施設・建物スペースをデータベース化し、一般にその情報を公開。スペースを借り受けた市民、事業者等はその場でプレイスメイキング*を試み、多様なアクティビティ（イベント、展示会等）を展開。街中のプレイスメイキング*のスポットを巡るまち歩きを観光資源化していく。

[「市が立つまち柏原」プログラム]

旧柏原支所庁舎（かいばら一番館）など、市街地の施設・建物や空き地を活用して、年中まちのどこかでマルシェやフリーマーケット、軽トラ市、キッチンカーフェスなどの催事が行われるよう、出店者を募るプログラムを実施。チャレンジ・ショップ事業と連携。

※「丹波ハピネスマーケット」：毎月第2土曜日に柏原八幡宮のふもとで開催する定期市（令和元年度「たんばすぐれもの大賞」受賞）。

[まちごとコワーキングスペース*「まるごと柏原」]

旧柏原支所庁舎（かいばら一番館）、柏原スタジオをはじめ、市街地の様々な施設・建物（空き家を含む）に執務・活動スペースを整備し多様なスペースを定額（サブスク）で利用できるサービスを開始。その一部については、チャレンジ・オフィス、チャレンジ・ショップ*、お試し住宅として公的機関等が借り上げ、起業志望者、移住希望者等に提供。

[ポケットパーク]

活用可能な空き地を住民たちのプレイスメイキング*でポケットパークとして整備。子供たちの遊び場や高齢者の交流の場になるなど、まちの居場所としての機能を発揮。また、パブリックアートやアーティストの作品の展示場としても活用。

[まちなかミニギャラリー、ミニ博物館]

新たな人の流れ（回遊性）を生み出すため、小路に並ぶ民家・商店の一角を利用し、芸術文化作品や歴史的史料等を展示したミニギャラリー、ミニ博物館を開設。これらを巡るまちの界隈ツアーを催行。

※「丹波かいばら雛めぐり」：城下町地区13の会場で新旧様々な雛飾りを展示（3月中旬~4月上旬開催）

[まちなか道具蔵・リペアハウス]

民家に残る道具類を空き家に貯蔵。必要とする人に貸与するほか、道具の使い方のワークショップを開催。また、道具の修繕や道具を使った家具等日用品の修繕を実施。

[拡張現実、仮想空間での「柏原城下町」の再現]

街中で江戸時代の柏原城下町の町割りを AR*（拡張現実）で再現。また、インターネットの仮想空間（メタバース）で城下町の光景を復元するとともに、当時の人々の暮らしぶりを紹介。

［コミュニティ冷蔵庫・保管庫（フードバンク）］

まちなかの施設・空き家等に冷蔵庫・保管庫を設置し、個人や飲食店などが不要な食品・物を冷蔵庫・保管庫に収め、必要な人に提供・貸出。コミュニティベースでの相互扶助、資源循環、共有経済（シェアリング・エコノミー*）の取組として推進

［まちなか食堂（子ども食堂・大人食堂）］

にぎわいの創出、共助のつながりの拡大を目的に、子どもから若者、高齢者まで、世代に関わらず、誰もが地産地消の食を味わいながら、集まった人々との交流・団らんを楽しめる食堂事業を推進。

［IT 特区・スマート KAIBARA（Local 5G*拠点）］〈再掲〉

［まちなかシャトル（EV トゥクトゥク、EV カート）］

街中を周回するちょい乗り手段として導入。スマホアプリで申し込み。将来的には、自動運転化され 24 時間運行。

4．想定される将来のエリアの姿（未来の利用者の声‒シナリオライティング）

80 代 女性
柏原在住
一人住まい

<u>賑やかになり、お喋りする場所も増えました</u>

ひと昔前までは通りを誰も歩いとってない静かなまちやったけど、駅南が整備されたら、よそからいろいろな人が来ちゃって賑やかになりましたわ。空き家やった古い民家もようけイベントに使われとるから、うちらもそこで茶話会とかようやります。今は自動運転の電動カートでどこへでも連れて行ってもらえるし、よう出かけるようになりました。楽しみなんは、まちなか食堂。近くの子どもさんやお母さんらと喋りもって、ここらで採れたお米や野菜をつこうたご飯を食べるんが一番ええなぁ。

30 代 男性
スタートアップ経営
柏原移住
Iターン

<u>IT 特区でスタートアップ経営</u>

東京の企業で画像処理、動画作成のクリエイターとして働いていました。起業を思い立って開業場所を探したのですが、柏原が一番良い条件だったので、ここに決めました。決め手は、兵庫情報ハイウェイ*を活用し、５G*環境で作業できることです。東京のクライアントと頻繁に画像、動画のやりとりをしていますが、これまで円滑に作業を進めることができています。

もう１つの決め手は、やはりまちの雰囲気ですね。古い建物も残っていて、落ち着きと居心地の良さを感じます。そういえば、ご縁があって、ヴァーチャル柏原城下町の作成に携わらせていただいています。これからも、自分のスキルでまちづくりのお手伝いできればと思っています。

40 代 女性
アーティスト
移住者
柏原移住

<u>創作の場を求めて来ました</u>

海外で創作活動に明け暮れて 20 年。ようやく日本に戻ってくることにし、昨年ここ柏原を拠点に活動することにしました。移住の決め手は場所です。「まちの居場所」プログラムで古民家をあっせんしてもらい、そこを改装し創作スペース兼ギャラリーとして活用しています。借り受けた建物に入ったとき、子供時代を思い出し、懐かしさからここに決めました。建屋の使い勝手も良く満足しています。近所の人はとても親切で、私をいろいろとサポートしてくれています。今度近所の人の紹介で、新しくできたポケットパークで私の作品の展示会を行う予定です。今後もこういう形で、柏原のまちづくりに関わっていきたいと考えています。

50 代 男性
公務員
市内在住

<u>新しい柏原、楽しいとこ、いっぱいやな</u>

「おばちゃん、たこやき焼いてな。」帰り道、お店の一番奥に腰掛けて千枚通しの手慣れたさばきを見ながらコーラの栓を抜き、焼きたてを頬張る。「さぁ次、本屋行こか。ジャンプ今日発売やろ。」「いや、やっぱりボーリングやな。」昔の柏原はこんな若者がいっぱいおってな、通りは町屋の明かりが煌々と輝いててん。

今、茅葺き民家のおしゃれなカフェや老舗の和菓子屋さんは観光客で賑わって、街のあちこちで起業家が昔の町屋をそのまま活かしてビジネスを展開してはる。街中を歩けばウィンドショッピングも楽しめそうやで。休日には孫たちと駅南のイベントに出かけ、シャトルで丹波の森公苑まで足を延ばしてな、スポーツクライミングに挑戦や。新しい柏原、孫たちの笑顔が今から楽しみやねん。

Ⅴ ３エリアの一体的整備、連携促進に向けて

３エリアについて前述のとおり整備するとともに、以下の通り、エリア間の連携をハード・ソフト両面から推進していく。

● 歩行者道の整備

エリア間を移動する歩行者の動線確保を図るため、一部区間において歩行者専用道の整備を進めるとともに、JR 福知山線を跨ぐ南北連絡道・橋の施設を検討する。

● 新たな移動手段の導入

EV カート、EV トゥクトゥクなどのグリーン・スローモビリティ*を丹波の森公苑～柏原駅南用地間～城下町地区間で定期的に運行する。また、柏原交流ゾーン内で EV バイク、電動自転車等のレンタル事業を実施する。

［里山シャトル・まちなかシャトルの運行］〈再掲〉

里山シャトルやまちなかシャトルを定期運行。

［ミニ・トランジットモール（発着場）の整備］〈再掲〉

［サイクルステーションの設置］

EV バイク、電動自転車等の貸出・返却地点を柏原交流ゾーン内に数か所に設置。

● 高速大容量通信網の整備

城下町地区にある兵庫情報ハイウェイ*のアクセスポイントから、城下町地区～柏原駅南用地～丹波の森公苑間の専用回線を確保し、柏原交流ゾーン全体で高速大容量の通信網へのアクセスを可能にする。また、専用回線を利用者が使える拠点施設をゾーン内に設ける。

［IT 特区・スマート KAIBARA（Local 5G*拠点)］〈再掲〉

● エリアマネジメント組織の設立

柏原交流ゾーン全体のエリアマネジメントを行うパートナーシップ（協議会）組織の設立を図り、エリアブランディングを一体的に行うとともに、集客イベントやたんばコインを活用したキャンペーンなどを関係機関と連携して実施する。

● 循環型・環境共生型社会経済システムの導入

再生エネルギー利用、廃棄物リサイクルなど、環境面でもゾーン一体となった取組を推進し、サスティナブルシティとしての特色をうち出していく。

また、経済面でも循環経済、共有経済の実現に向け、デジタル技術を活用した新しい仕組みの導入を促進する。

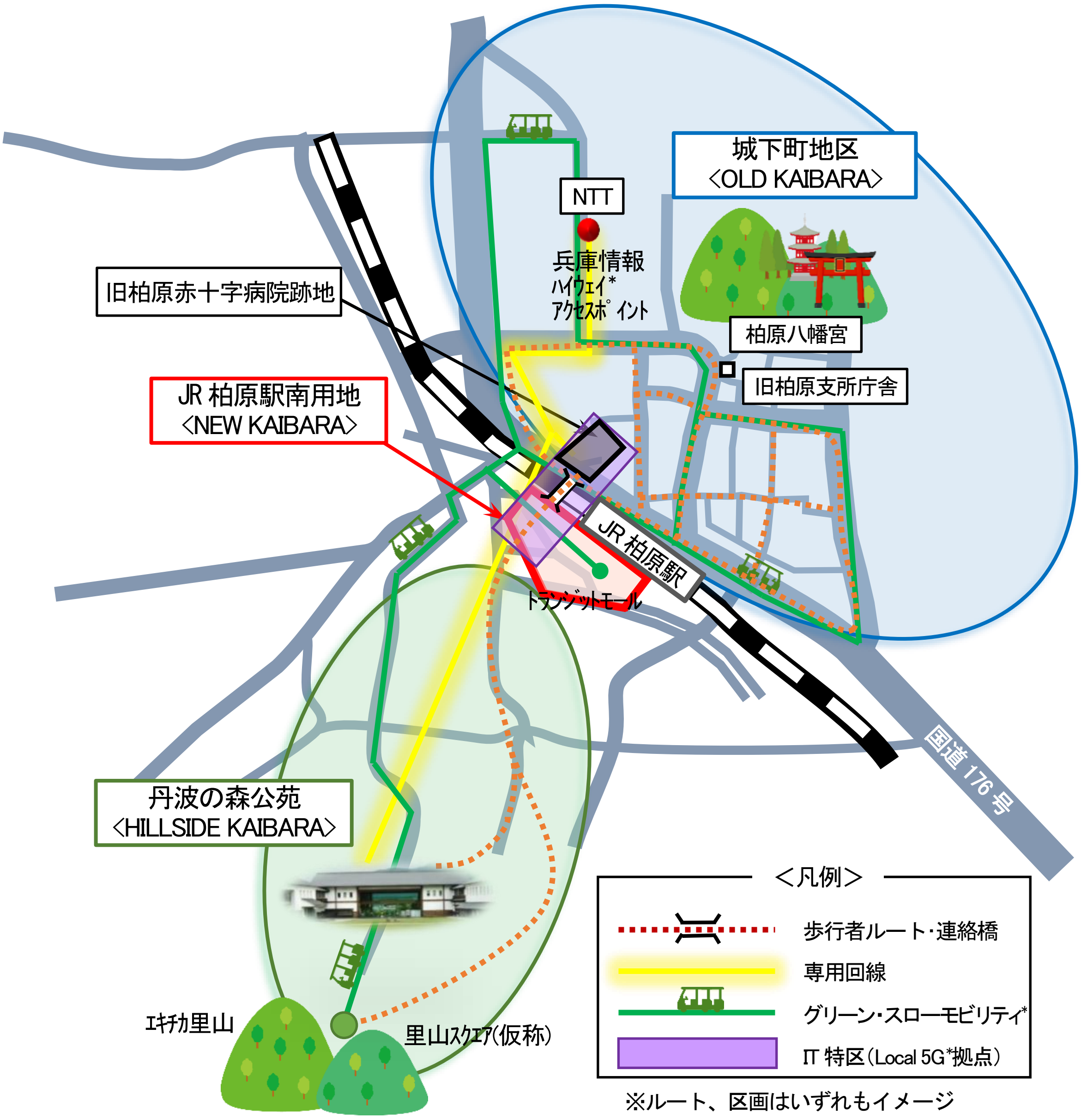
［再生可能エネルギー100%ゾーンへの取組］

柏原交流ゾーンのなかの公共施設、集合住宅等において、全体の電力消費を丹波市内においてバイオマス燃料等で発電した電力で全量賄うプランを推進（グリーン電力証書の購入、太陽光発電の推進、蓄電池の整備等)。

[地域電子ポイントの活用による資金循環の促進]

今後普及が見込まれる地域電子ポイント「たんばコイン」を活用して、ゾーン内での資金循環を促進するとともに、モノやサービス、スペースなどをシェアする共有経済化を推進。

＜３エリア間の連結・回遊方法＞



Ⅵ 柏原交流ゾーンを核とした広域連携の推進

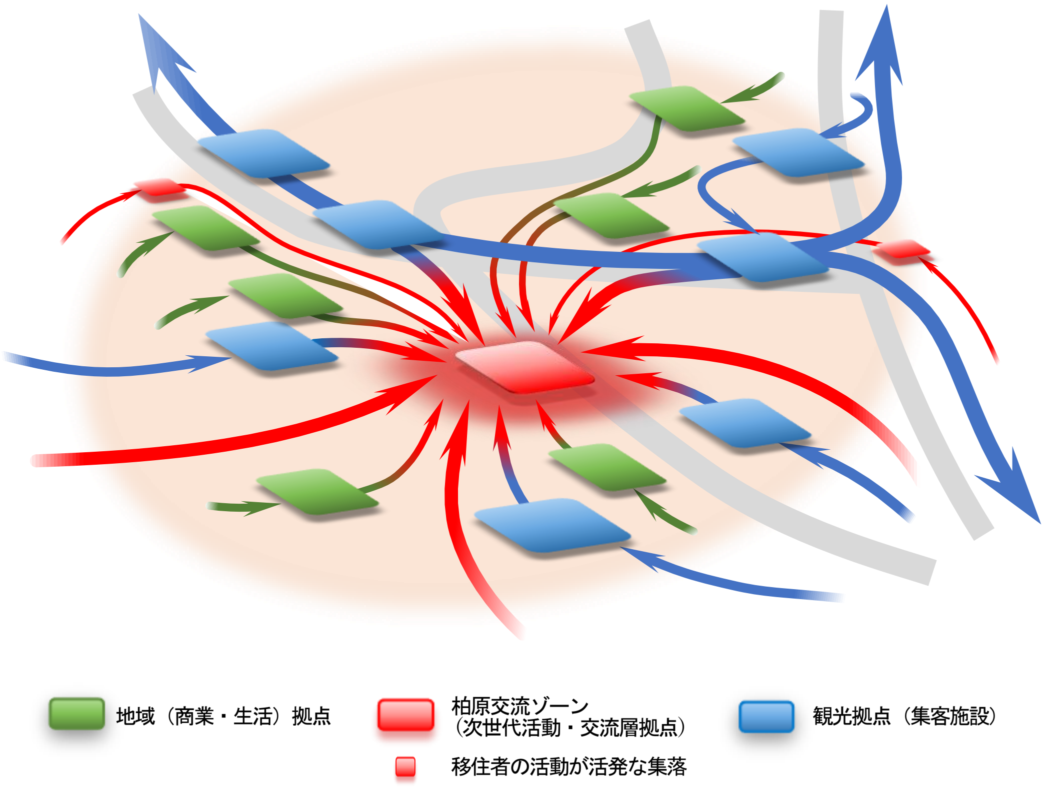
今後、柏原交流ゾーンを現在の丹波にはない「**次世代活動・交流層」が集まり、交わるまち**として再整備し、求心力を高めることで、丹波市内外から新しい人の流れを戦略的に生み出していく。

● <u>丹波市都市圏における柏原交流ゾーンの可能性</u>

・「次世代活動・交流層」をターゲットにした施設群からなる柏原交流ゾーンは、その独自性、固有性から観光客にも魅力的なものとして捉えられ、新たな訪問先、デスティネーションになる可能性がある。それにより、丹波市内での周遊型観光が多様化し、観光客の市内滞在時間が延び、観光消費額が増大することも期待される。

・地域住民にとっては、地元の商業施設や生活施設等にはない文化・交流、商業機能を備えた柏原交流ゾーンの存在は、魅力的なものとなりうる。日常生活のなかでの立ち寄り拠点（地域拠点）からさらに足を伸ばして、柏原交流ゾーンを訪れ、様々な人と触れ合い新たな情報に接することは、各人の生活にポジティブな変化をもたらすであろう。

・一方、丹波市内の農村集落においても、近年移り住み、起業や様々な活動を行っている「次世代活動・交流層」と呼ぶべき人たちがいる。こうした移住者の人々も、「次世代活動・交流層」が各地から集まる柏原交流ゾーンを自らの活動空間や交流の場として利用することを望むと思われる。



丹波市都市圏のイメージ図（柏原交流ゾーンに入るヒトの流れ）

- **柏原交流ゾーンと市内拠点・施設間の連携推進**

・このように柏原交流ゾーンの整備は、単に柏原にとどまらず、丹波市内全域にポジティブな影響をもたらすことが期待されている。都市圏域全体への柏原交流ゾーンの波及効果をさらに高めていくためには、今後、交流ゾーンの施設と市内各種施設の間の機能連携も検討していかなければならない。

・例えば、商業・物販をめぐっては市内の道の駅等の集客施設と柏原交流ゾーンの施設間で、イベントやキャンペーンを一体的に展開することなどが想定されよう。また、芸術・文化面でも、柏原交流ゾーンと市内文化施設間で、リレー方式や共通テーマでの展示会や催事を行うことなども検討されよう。

・木工製品、農産物、地場産品などについては、丹波のショーケースである柏原交流ゾーンにアンテナショップを出店し、そこから本拠地や制作・加工・生産の現場へのコト体験ツアーなどを企画・催行し、新たな人の流れを生み出すことなども考えるべきであろう。

・丹波のゲートウェイである柏原交流ゾーンから、市内の観光・集客施設や里山などの自然空間に向かう新たな人の流れを生み出すため、巡回・周遊バスの運行や自転車・ＥＶバイクなどのレンタル事業の市内展開なども検討課題となろう。

・歩いて暮らせるまちづくりを推進する柏原交流ゾーンらしく、ここを拠点に車を置き、歩いてあるいは自転車、公共交通機関に乗って市内各所を巡る、脱自動車型、時間消費型の旅（パーク＆ウォーク、パーク＆ライド型ツアー）を提案していくべきであろう。

Ⅶ 今後の課題　－基本計画策定に向けて－

本基本構想を具体化する「柏原交流ゾーン基本計画」の策定（2023(令和 5)年度事業）にあたっては、以下の課題に留意しつつ検討にあたる。

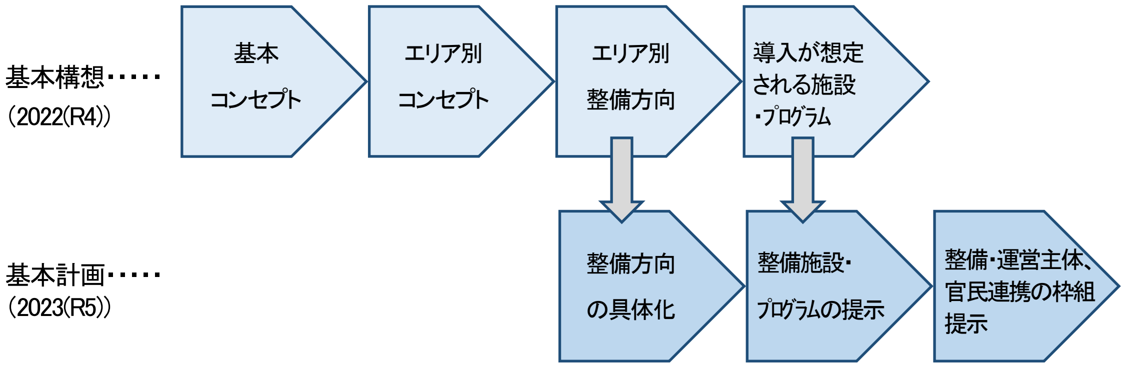
- **整備方向の具体化**

・基本計画においては、３つのエリアの整備方向をさらに具体的に検討し、方向性とその実現に向けた手段である施設やプログラムの関連付けを行う。
・また、方向性の実現に寄与する既存の施設やプログラムもとりまとめる。

- **今後導入が想定される施設のフィージビリティ検証**

・基本構想で記した「今後導入が想定される施設・プログラム等」として挙げられた施設について、基本計画の策定作業のなかで、その実現可能性を検証し、施設整備の優先順位を明らかにする。
・丹波の森公苑、城下町地区における施設整備にあたっては、新設だけでなく、既存施設の活用（転用、多目的利用）も念頭に置く。
・各施設の整備を行う主体についても検討を行う。

＜基本構想と基本計画の関係＞



- **パートナーシップ形成と主体間の役割分担**

・柏原駅南用地の整備については、民間活力の活用を基本としつつ、官民連携のあり方を基本計画において示す。
・城下町地区の整備に向け、TMO である(株)まちづくり柏原との事業協働の枠組みや市民参画のあり方を検討する。
・丹波の森公苑の施設整備については、現在の指定管理者である(公財)兵庫丹波の森協会と民間事業者、NPO 等との連携のあり方について検討を行う。
・パートナーシップの形成に向けて、市民の提案や発議の場、創意工夫できる機会を設け、市民が当事者意識を持ちながら参加できるプロセスとすることや、各段階において多様な民間事業者が参画できる柔軟なプロセスとするなどの工夫が必要である。

- **JR 柏原駅へのアクセス検討**

・柏原駅南用地から JR 柏原駅へのアクセス方法について、駅南用地のゾーニング、土地利用・施設配置計画を策定するなかで検討する。駅直結（駅南改札設置）、あるいは JR 福知山線を跨ぐ南北連絡橋の設置によるアクセス確保のいずれか（もしくは両方）を選択する。
・柏原駅駅舎（ウッディプラザ山の駅）の老朽化が進んでいることから、アクセス確保とともに、その改修の必要性についても検討する。
・南北連絡橋に関しては、歩行者以外の自転車、グリーン・スローモビリティ*等の利用についても勘案して検討を進める。

- **ゾーン周辺エリアとの機能連携**

・柏原交流ゾーン周辺には、旧柏原病院跡地など活用可能な用地がある。それらの用地とゾーン内の用地・施設との機能連携のあり方について検討を行う。

- **柏原駅南用地の暫定利用推進**

・柏原駅南用地については、様々な機会を通じて活用可能な用地としてアピールしていくため、2023（令和 5）年度から様々なイベントに用地を提供する。また、一定の条件のもと、賑わい創出につながる飲食事業者等の利用を認めるものとする。
・柏原駅南用地の本格整備が完了するまでには、一定の年数を要することから、その間の土地の暫定利用方策について基本計画のなかに示す。

おわりに

イメージフルでソウルフル。イメージ豊かで、心がこもった、少しでも心動かされるものに。

本基本構想は、柏原交流ゾーンの将来について多彩なイメージを想起してもらうために作成したビジョンである。内外の多くの人々から聴いた夢や希望を可能な限り反映し、柏原交流ゾーンの将来に様々な発展可能性があることを示すことを目的にとりまとめたものである。本書を読んで、柏原交流ゾーンの将来に夢を抱き、整備・再整備の取組に関わることを希望する個人・団体が一つでも多く現れることを期待している。

しかしながら、夢や希望を実現していくには、利用可能な資源やコスト等を勘案し、客観的にその実行可能性を探っていかねばならない。それが、来年度策定の「柏原交流ゾーン基本計画」で行う作業である。夢、ビジョンを示した基本構想とは異なり、基本計画は、施設整備の規模や優先順位、推進主体等を明らかにするアクションプランとしての性格をもつものになろう。

今後、柏原交流ゾーンが次世代社会に対応したまちへと変貌し、時代のフロントランナーになるかどうかは、柏原にかかわるすべての個人・団体の熱量にかかっている。基本計画の検討作業を進めるにあたっては、柏原交流ゾーン構想検討会議だけでなく、地域の方々をはじめとする多くの人とじっくりと議論し、機運の醸成を図っていきたい。

「やっじょ、柏原！ これからがはじまりやさかい」

＜柏原交流ゾーン構想検討会議メンバー・検討状況＞

1　検討体制

⑴ 柏原交流ゾーン構想検討会議

・ 学識経験者、地域住民、地域団体、商業者、行政機関の代表等で組織し、プロジェクト全体の方針性を検討し、整備基本構想のとりまとめを担った。

＜委員＞

	役　職	氏　名
学識者等	関西学院大学建築学部長・教授、丹波の森公苑長	角野　幸博
	武庫川女子大学研究教育社会連携室長・特任教授	大坪　明
	関西大学環境都市工学部建築学科教授	岡　絵理子
	神戸大学大学院工学研究科准教授	栗山　尚子
	有限会社 Lusie 代表	小泉　寛明
	関西大学社会学部教授	松下　慶太
商業者	丹波市商工会　会長	篠倉　庸良
	丹波青年会議所　理事長	石川　毅
地域団体	株式会社まちづくり柏原　代表取締役	岡林　利幸
地域住民	柏原自治会長会　会長	大野　亮祐
	柏原自治協議会　会長	大西　修太郎
	新井自治協議会　会長	谷垣　昌三
行政機関	丹波市　技監	上畑　文彦
	丹波県民局　局長	今井　良広

＜オブザーバー＞

交通事業者	西日本旅客鉄道株式会社兵庫支社
行政機関	兵庫県企画部地域振興課
	兵庫県病院局企画課
関係団体	公益財団法人　兵庫丹波の森協会

⑵ 学識者ワーキング

・ 検討会議の学識者等で構成。専門的知見に基づき、柏原交流ゾーンにおける新しい都市機能のあり方や手法等を検討・提言。

＜委員＞

役　職	氏　名
関西学院大学建築学部長・教授、丹波の森公苑長	角野　幸博
武庫川女子大学研究教育社会連携室長・特任教授	大坪　明
関西大学環境都市工学部建築学科教授	岡　絵理子
神戸大学大学院工学研究科准教授	栗山　尚子
有限会社 Lusie 代表	小泉　寛明
関西大学社会学部教授	松下　慶太

＜オブザーバー＞

地域団体	株式会社まちづくり柏原
行政機関	丹波市ふるさと創造部
関係団体	公益財団法人　兵庫丹波の森協会

⑶幹事会

・ 検討会議の下部組織として丹波市と丹波県民局の実務者で組織。

（丹波市）	ふるさと創造部：総合政策課、ふるさと定住促進課
	財務部：資産活用課
	産業経済部：商工振興課
	建設部：都市住宅課
（丹波県民局）	県民交流室：総務防災課、たんば共創課
	丹波土木事務所：まちづくり建築課

２　検討経緯

⑴ 学識者ワーキング、検討会議

・ 学識者ワーキング　準備会　　令和４年３月10日(木)　13:00～
柏原市街地の変遷やこれまでのまちづくりの取組概要や経緯説明、現地視察

・ 第１回学識者ワーキング　　令和４年７月12日(火)　13:30～
これからの地方都市における都市像、交流ゾーンの課題や可能性等を意見交換

・ 第１回検討会議　　令和４年９月１日(木)　13:30～
地元委員からプロジェクトへの意見や要望を中心に、ゾーン全体や各エリアに望ましい機能や整備の方向性を意見交換

・ 第２回学識者ワーキング　　令和４年12月９日(金)　17:00～
ゾーン全体とエリア別に望まれる機能や整備の方向性、連携方策を意見交換

・ 第２回検討会議　　令和４年12月27日(火)　13:30～
参考事例を踏まえ、ゾーン全体とエリア別に望まれる機能の方向性の意見交換

・ 第３回検討会議　　令和４年３月23日(木)　10:00～
今年度の議論を踏まえた「柏原交流ゾーン整備基本構想」について

※幹事会は令和４年度に３回開催

⑵ 地元グループ等との意見交換

・ 地元若手グループ　　令和４年９月28日(水)
・ たんばユースチーム　　令和４年10月19日(水)
・ クラフト関連等のネットワーク　　令和４年10月24日(月)
・ たんば女性起業家ネットワーク　　令和４年11月16日(水)

＜用語集＞

用語	意味	該当ページ
AI	人工知能（Artificial Intelligence）。学習・推理・判断など人間が行っている知的な作業をコンピュータ上で人工的に実現する技術	5, 14, 17
AR	拡張現実（Augmented Reality）。現実空間内に画像データなどのデジタル情報を付加し、現実空間をデジタル空間によって拡張する技術	27
5G	次世代の通信規格。5th Generation(第 5 世代移動通信システム）の略。4G の約 100 倍の通信速度により、多数同時接続・超低遅延を実現	17, 21, 28, 29, 30, 31
5R	Reduce（リデュース：発生抑制）、Reuse（リユース：再使用）、Recycle（リサイクル：再資源化）、Refuse（リフューズ：不要なものを買わない）、Repair（リペアー：修理）	12
Local5G	地域や産業のニーズに応じて地域の企業や自治体が個別に利用できる 5G ネットワーク	21, 28, 30, 31
関係人口	移住した「定住人口」でも、観光に来た「交流人口」でもない、地域や地域の人々と多様に関わる人々のこと	6, 12, 13, 15, 18, 23
グリーン・スローモビリティ	時速 20km 未満で公道を走ることができる電動車を活用した短距離の移動サービスで、その車両も含めた総称	4, 21, 30, 31, 35
コワーキングスペース	フリーランスや起業家などが、執務・作業スペースなどオフィスの基本設備を共有しながらそれぞれ独立して仕事を行う場所。利用者間での情報交換、交流が盛んである	15, 16, 20, 22, 23, 24, 25, 26, 27
シェアオフィス	複数の企業や個人事業者がオフィスとして共有する施設。コワーキングスペースと違い、個室が用意されている施設が多く、起業間もないスタートアップ企業などの利用が多い	23
シェアリング・エコノミー	個人等が保有する空間やモノ、移動手段、知識・スキルなどの資産を、インターネットを介して他の個人等も利用できるようにする仕組み	6, 28
チャレンジ・ショップ	行政や商工会などが、将来店舗開業をめざす人に対し、お試し出店の場として期間限定で提供する空き店舗や施設。丹波では（株）まちづくり柏原が「あっとかいばら」を開設	8, 15, 27
超スマート社会(Society5.0)	デジタル技術・資産の活用により、生産性向上や環境負荷低減、コスト低下を実現するとともに、人々の潜在的なニーズに対応したきめ細かなサービスの提供が可能になる快適で活力に満ちた社会	5, 10
デマンド型乗合タクシー	タクシー車両を使用した、利用者の予約に応じて運行する乗合型公共交通サービス	21
テレワーク	ICT を活用した時間や場所にとらわれない働き方。在宅勤務やタブレット端末等による「モバイルワーク」、勤務先以外のスペースで仕事をする「サテライト・オフィス」の形態がある	4, 5, 10, 18, 20, 22, 24
バウハウス(独語: Bauhaus)	1919 年、ドイツのワイマールに設立された工芸・写真・デザインなどを含む美術と建築に関する総合的な教育を行った芸術学校。モダニズムの源流となった教育機関	17, 20, 22, 25
兵庫情報ハイウェイ	兵庫県内に整備した高速通信網。令和 3 年 2 月に通信容量を 20Gbps に増強。公的機関の利用が主だが、民間にも開放。丹波篠山、丹波市柏原にもアクセスポイントあり	17, 21,29, 30,31
プレイスメイキング	公園、広場、遊歩道などの共有スペースを人々の多様な活動の場として利用することで、住民等にとって居心地の良い場・空間（プレイス＝居場所）へと変えていく試み。	17, 24, 25, 27
ポップアップ・ストア	空き店舗や空きテナントなどに臨時、期間限定で出店する小売店舗。「Pop up＝不意に現れる」と「Store＝お店」を組み合わせた言葉	15
ワーケーション	「ワーク(仕事)」と「バケーション(休暇)」を組み合わせた造語。テレワーク等を活用し、観光地やリゾート地、温泉地等、普段の職場とは異なる場所で余暇を楽しみつつ仕事を行うこと	10, 24, 25

柏原交流ゾーン整備基本構想

－なりいや柏原　時代のフロントランナーに‼－

令和 5(2023)年 3 月策定

柏原交流ゾーン構想検討会議　兵庫県丹波県民局

〒669-3309　丹波市柏原町柏原 688　兵庫県柏原総合庁舎内
電話　0795(72)0500（代表）
Email　tambakem@pref.hyogo.lg.jp
HP　http://web.pref.hyogo.lg.jp/area/tanba/vision.html